

ふかんど

オ381号

1986.10.26

谷津干潟愛護研究会
〒57 習志野市谷津三一二五-十一
 電話〇四七四-51-5〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000円

創立
1974.12.9

事務局 0474-517076 中村容子

以前から、いつまでか〜思っていた。ありがたひ、すまないなあと思っ、いつか書かねばならぬと感じていた。

日曜日にタクシ-の出番になった時。干潟に長時間居られぬし、泥まみれにならぬことです。道具はタクシ-のトランクに積んで、「いそしぎ」に行きますが、軽い作業しか出来ません。日曜日はタクシ-の客も少なく、服が汚れては仕事上まずいのです。恒

出て来た自転車

これぞ台目。まだ〜出て来るぞ。つい先日(10月20日)は、犬の頭が骨が出て来た。

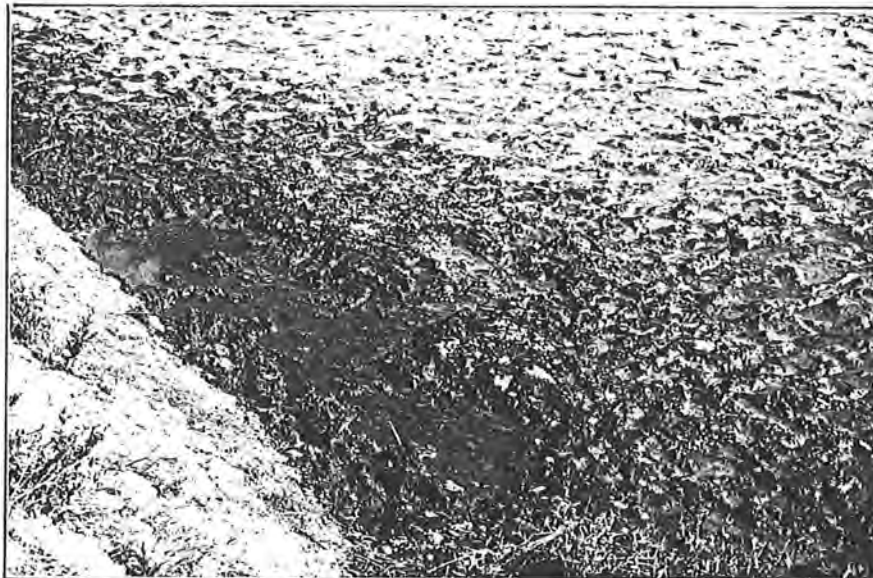
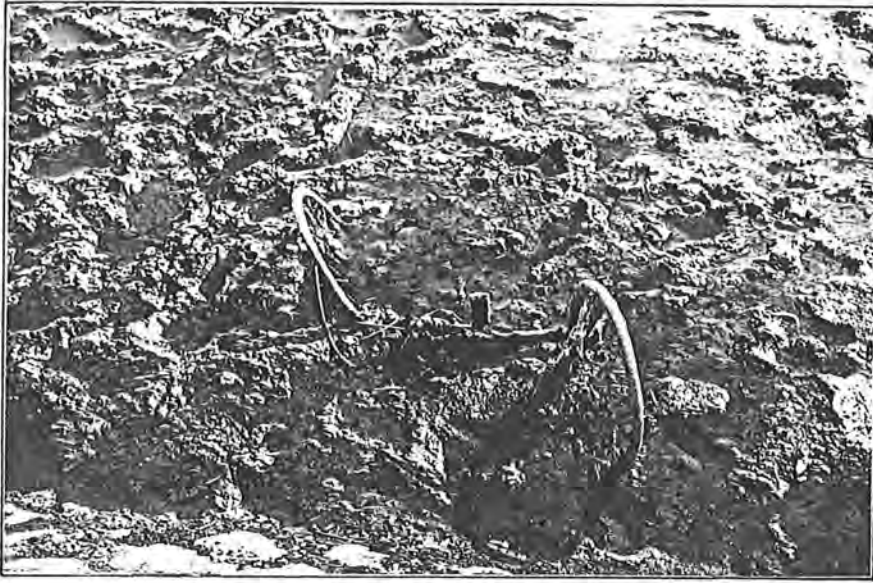
犬だっ、生きてゐる時はかわいから

例で休日毎に観察会やクリーン作戦をやってくれてゐる長塚さん、五十嵐さん、大滝さん、宮脇さん、山岸さん、そして他のみなさん、ほんとうにありがとうございます。感謝しています。それから、火曜日の主婦産のクリーン作戦。松枝さん、宮川さん、井本さん、中村さん、種田さん、本宮さん産、森田は内心、否外心と、大変心強く思っておりますから〜。カンベンネエ。

れてさ、死んじやたら、どういやになつて、汚ないモノと考えられ、捨てられちゃったんだなあ〜。かわいそうに。アヒルと死んでた。ネコも死んでた、あの夏の日。そして干つからびて、とうとう骨だけになつたよ。

何かボランティアなものか。何か奉仕活動なものか。そんなもの、流れる雲か、風にそよぐ葎ぐらひに心得よ。

掘って掘って又掘って。そして、夏が過ぎ、どんどん地面が下がちやう、いつの間にかこんな穴が。



・・・その代り森田は、小だんの日かんばってますよ。今は大蔵省の前で。

いつか、上映の機会を作りたいですね

ひがた うた 干潟の詩

●16ミリ/カラー/31分/¥200,000 No.5821

文部省選定

明るいつづなを舞台に
詩情豊かな画面と音楽で
やさしく訴える……



ユニークな映画にふさわしいユニークな映画紹介にしてみました。

対談 映画「干潟の詩」を語る

東京都小学校視聴覚教育研究会参与 渥美 健三
映画監督 瀬藤 祝

渥美 試写を見て最初に感じたことは、ユニークな映像だということです。ストーリーはすこぶる簡単でした。

瀬藤 ええ、自然を知らない都会の少女と、自然そのものような海辺の少年の出会いと別れの物語ですから。要はこの映画を見た人が、少女の行動を追体験することによって、今までは何でもなかった風景や物の見方がどう変わっていくか、そこに視点をすえてみたわけです。

渥美 美しい自然を守ろう、と口で言うのは簡単ですよ。それを言わないで、童心の世界を展開していく手法はさすがです。干潟の美しさもまた格別でした。

瀬藤 自然はメルヘンの世界です。潮の干満によって刻々と姿を変える干潟、そこに生息するカニや貝などの小動物、それをえさにする鳥たち。自然は生きています。海岸は美しさだけで私たちを慰めているわけではありません。海は多くの生命をはぐくんでいます。海をコンクリートで固め、汚水でけがして、生命を遠くへ追いやっている昨今、私たちは、人間にとって一番大切な生命を生みだす生きた自然を、そして自然をいつくしむ心を取り戻さねばならない、と痛切に感じたわけです。

渥美 映画の終り近くで、貝殻を自動車に踏みつぶされて涙ぐんでいる少女に向かって、母親が「そんなものデパートでいくらでも買えるわよ」と言いますね。あの言葉は大変印象的でした。

瀬藤 この映画の意図はあの一言に集約されているといっているんです。つまり、現代は形が心になってしまっている時代です。知らぬまに自分が形だけにとらわれている怖さというものを、この映画から感じ

とっていただけたら、と思いますね。

渥美 さらに傍観者の立場から一步進めて、自分たちは実際に何をしたらいいのかを考えさせますよ。その点、小学校5年の社会科に出てくる「経済発展と環境破壊のかかわり」を学ぶのに、学習の導入教材としてこの映画はぴったりですね。

瀬藤 これまでの教育映画と違って、結論を出してませんから、話合いのテーマはいくらでも引き出せるんじゃないですか。

渥美 そうそう、親子映画会にも児童映画会にも、また社会教育にも大いに使えますよ。そこがユニークなんです。

瀬藤 親と子が一緒に見て話し合ってくださったら嬉しいですね。そして大人は童心に返ってほしいわけです。

渥美 特に感心したのは、音楽がまたユニークですね。ドラマから一応独立しながら、このメルヘンの世界とテーマをみごとに象徴していただいていたと思います。

瀬藤 作曲・演奏の中林淳真さんはギター奏者として著名な方ですが、脚本を読んでもらったところ快く引き受けてくださいました。今回は特にアルパというラテン系の民族楽器を使って、その独特の音色を十二分に生かしてくださいましてね。

渥美 主役の男の子と女の子がとても生き生きと演技していますね。

瀬藤 2人は20日間近い合宿でスタッフともすっかりうちとけ、潮の満ち干との格闘で並々ならぬ苦勞の連続でしたが、結構楽しんでいました。

渥美 そういう愛情というか団結心がこのようないい映画を生んだんですね。

■この映画に出てくる干潟のおもな生き物たち
貝類/アサリ、マテガイ エビ・カニ類/アシハラガニ、チコガニ、オサガニ、ヤマトオサガニ、マメコフシガニ、コメツキガニ、イシガニ、ヤドカリ 鳥類/ヒバリ、ハマシギ、ソリハシギ、タイシャクシギ など

企画にあたって

自然保護を主張し続けてきた協会が、創立30周年を迎えたいま、あらためて訴えるとすれば、数万語の説得より、一つの共感ではないでしょうか。子供から大人まで、私たち人間には本能的に抱く自然への共感が、なぜかあります。

〈目先の利益のために、身近な自然が失われて本当にいいのだろうか〉 私たちの母なる自然であった干潟を通して、ただそれだけを語りかけたのがこの映画です。この映画から、自然保護について何かを考えていただければ幸いです。

(財)日本自然保護協会理事長 千葉大学教授・理学博士 沼田 真

■企画 日本自然保護協会
■この映画を監督・指導して下さった先生方(協会創立30周年記念映画製作委員会)
日本自然保護協会会長 荒垣秀雄 毎日新聞社 社会部デスク 原 剛
林業試験場鳥獣第一研究室長 阿部 学 上野動物園 飼育課 係長 増井光子
神奈川県立新羽高校教諭 金田 平 文化庁記念物課 調査官 品田 稜
日本自然保護協会 常務理事 齊藤賢二 草地試験場草地生態研究室長 西村 裕
NHKチーフ・ディレクター 水野憲一 日本自然保護協会 主任研究員 木内正敏

■製作スタッフ
製作 原 正次 脚本 郡 長昭
石川茂樹 撮影 多田和夫
製作担当 栗山 究 照明 小野 勇
原・監督 瀬藤 祝 音楽 中林淳真
録音 村田好次
脚本 加藤有芳 現像 東映化工

学術指導 東邦大学助教授 秋山章男 現場助手 仁科善隆

D-4433 '82/8
'83/4

監督の瀬藤祝氏とは知己で、10月18日に氏の映画、「いじめられているきみへ」と「やさしさ」を見に行きました。

学研
情報機材事業本部
〒146 東京都大田区仲池上1-17-15
☎(03)754-5430

あっ、カメだっ!?! 「又やってきましたね、ユリカモメの季節が」

ふかんど

才382号

1986.11.10

谷津干潟愛護研究会
 〒275 習志野市谷津三二二五十一
 電話〇四七四一五〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

事務局0474-517076 中村容子

今では干潟の風物誌に

上の言葉は、実は、毎日干潟の周囲を散歩している山岸さんが言ったのである。

今シーズン、ユリカモメが10羽程、初めて渡ってきたと聞かされたのも山岸さんからである。谷津干潟を、始終いつと、として最も見ているのは山岸さんであるから、最も早い確認であろう。(9月下旬)



ひとりでも多くの主婦や子供にやってもらおうと宮川さん。

「ふかんど島」の所で。鳥の名前を聞く市民も多い。

それからぐんぐん増え出し、現在は300羽くらい。正月頃は200を越すのである。二月に入れば300羽以上になる。パン投げをやり始めてから、今年で6年目。だんくと鳥をこわからなくなり、石ヤカンを投げつけた人を減ってきた。でも、まだ時々いる。大人も、バードウォッチャーも注意しない。



「森田さん、干潟にね、カメが、大きなカメがいるんですってよ。うちの子がね、さっき、見

かにあすこにカメがいたんだけど……」と指差した。「ああー、あすこいらへんねえ」と言いながら、私はその方向を見た。ハタと思ひ当った。やっ

で、つい最近、この主婦と又干潟で会った。

ぱりと思った。で、「奥さん、あれは流木ですよ。でもみんなそう見えるって」と

この流木、ほんとうにカメの形にそっくりですよ。

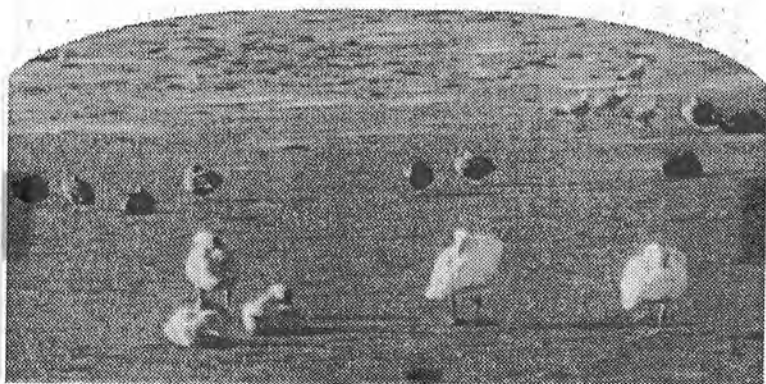


よろこそハクチョウ親子 2年ぶり

習志野の谷津干潟



カモな冬の渡り鳥でにぎわう習志野市谷津の谷津干潟に二十三日、二年ぶりにオオハクチョウの親子がやって来た。写真、夫婦三羽三羽で、旅の疲れか、この日は一日中羽を休めていた様子。
発見したのは、同市谷津三丁目に住む谷津干潟愛護研究会メンバーの山岸弘夫さん(70)。「たまたま干潟の周囲を散歩していたら、午前十時半ごろ鳴き声をきいて飛んで来て着水しました」といふ。



ひときり大きく、白いのですぐ目につきました。しかも五羽。子供の三羽は、いくらかクリム色がかっていた。まだ完全に羽根が変りきってないので、干潟に滞在したのは六時間ぐらいい。午後四時四十分、タクシィで飯山満を走っている時、前原上空を印旛沼方向に、一列に並んで飛んでいくのを見ました。

オ、オ、オのゴミの山と

松の木

西部戦線は更に西へ進み、ゴミの山を新たに二つ作った。

でも、悪い予感がやはり当たった。それは、今まで何百回も経験したが、せっかく拾って、こうして引き上げたゴミを、又干潟の中へほり込ませる。

外れていることである。

子供である。ほんの時たま大人も投げている。ストレス解消にはいいだろう。それに、ついでに月程前はいち面ゴミだらけだった所に、今は魚がウヨク。護岸の上からその泳ぐ姿があちこちに。カモがいっぱい来始め、足跡でスキ間をなくしていく。謙しと、本能的に何かをぶっつけたくなるんだらうよー。



ゴミの山の右側の松、ちよとした、松並木でしよう。今から10年前植えた時は、せいぜい30cm位しかなかったのに。

昭和52年、100本植えた頃は、まだ何軒かの納涼台がありました。近所の人、お正月になると、この枝を切って持っていくんだよね。



このゴミ、近所から苦情がきている。市と県と国と私達、さあ、どうしようか。

クリーン作戦の後で 谷津干潟をみんなで育て、大切にしよう

ふかんど

第383号

1986.11.20

谷津干潟愛護研究会
 干潟 習志野市谷津三丁目二五十一
 電話〇四七四一五〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000円

創立
1974.12.9

事務局0474-517076 中村オPM5時まで

干潟で野外授業

日時 12日5日(金) 9.30 ~ 午後 2.00

習志野市立谷津小学校4年生

先生・父兄・谷津干潟愛護研究

会・環境美化委員会(主婦)

尚、クリーン作戦は、谷津小の

先生と生徒・住宅都市整備公団・

私産の三者で合同で行います。

去年は森田が教室で話しをしまし

たが、今年は学校側の方から、現地

谷津干潟でやってほしいとのこと。

今、谷津小の4年生は、習志野

の海のこと、その歴史と移り変りを

いっしょうけんめい勉強しています。

土地の古老、昔漁業をやっていた

人から、ノリヤアサリの話、塩田のこ
 となどを調べている。その人産の家へ
 行くことは勿論、市や県、企業庁や
 図書館へも自分達で行くは、レポ
 ートにまとめ、先生に出している。先生
 はセントのみ。

当日は、観察やゴミ拾い、カモメにパ
 ン投げの他に、黄色ハンカチの旗や生
 物標本、写真パネル展示とします。
 つまり、丸一日干潟ですごくすのです。

先生と生徒は長い授業をかけて、と
 てと熱心です。潟スキーに生徒をのせ
 て滑る計画もあります。

習志野の海にすんでいた貝の標本と
 初めて、当会と協同で作る考えです。

以上、これからの事は谷津干潟に、新
 たな一ページを加えることでしょう。

10月21日。晴天の無風。

こんないい日ださん、おしゃべりがは
 ずまないはずはない。でなきゃ損、
 いいと思いますよ、月一度の主婦産
 のクリーン作戦だもの。

オ16回目の谷津干潟クリーン作
 戦は、とってどうだろうか。秋晴水
 の日。ゴミを拾うその小さな動作
 の一つ一つが、干潟を甦させたのです。



天気はいいし、ヨーグルトをおいしいし。心落ちつくひとときです。

大きな計画よりも、小さくとも着実な実践を、森繁久弥さんより。

写真は、松枝多加子さん(左)と宮川郁子(右)さん。

「・・・いつか学校で」、その夢がかかえられました。

滅ぼしてはならない、この貴重な自然、明日の子供達へ

ふかんど

第384号

1986.11.24

谷津干潟愛護研究会

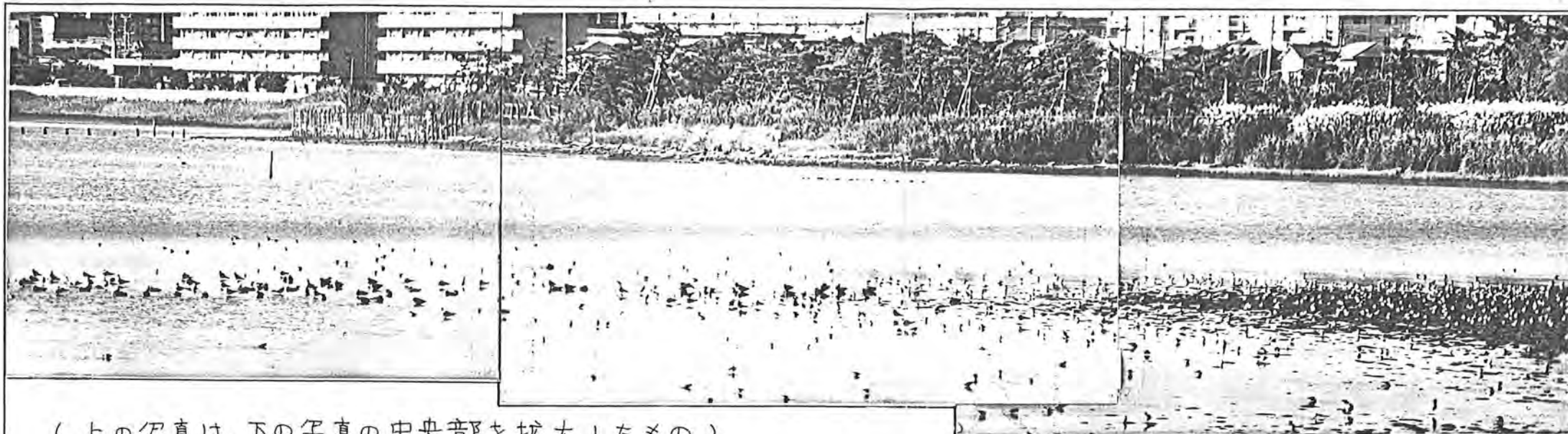
〒275 習志野市谷津三二二五〇一
電話〇四七四一五〇四四

文責 木田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

事務局0474-517076 中村容子 PM5時まで



(上の写真は、下の写真の中央部を拡大したもの)

町の中に残された
谷津干潟へどうぞ

私の住んでいる町は、千葉県習志野市の谷津。以前、谷津遊園地があったのですが、東京デイズニールランドの開園と同時になくなってしまう。そして今では大規模なマンション群が建設中です。

さて、その地区のすぐ隣に谷津干潟という所があります。ずっと昔、遠浅の海で、あさりや小魚がとれる美しい場所です。ここでの潮干狩りが有名だったので谷津遊園の名を知っている人も多いのではないのでしょうか。今も、遠く離れた海と二本の水路でつながっていて、一旦二度の潮の満ち干とともに、多くの魚がやってきては、また海へ返っていきます。その魚たちを求めて水鳥もたくさん来ます。

野鳥の観察やピクニックには絶好の場所となっています。

この谷津干潟が公園として残されるについては、並大抵のことではなかったと聞きます。東京湾の開発で、埋め立てがどんどん進んだとき、ここも例外ではなかったようです。でも、埋め立てから自力で守った人々がいて、そのおかげで今もこうして自然を楽しむことができるのです。

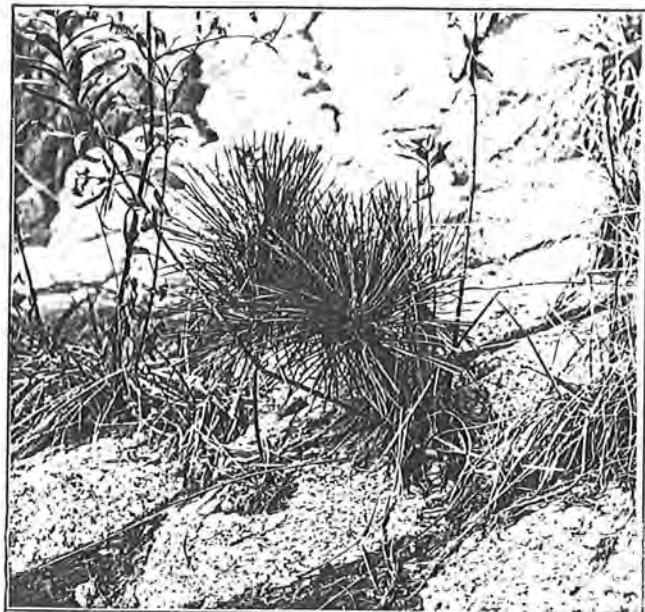
私は、その人々の努力に感謝をこめて、谷津干潟を紹介させていただきます。お近くに来たときは、ぜひ一度、行ってみてください。町の中に残った小さな海と、そこに生きる動植物たちの姿にきっと驚かれ、感動されると思います。

千葉県習志野市・宮川郁子

よかった、守ってきたよ
よかったと、その価値を
多くの人が奥感させ
るのは、10年、20年後
ぐらいして、やっとで
しよう。

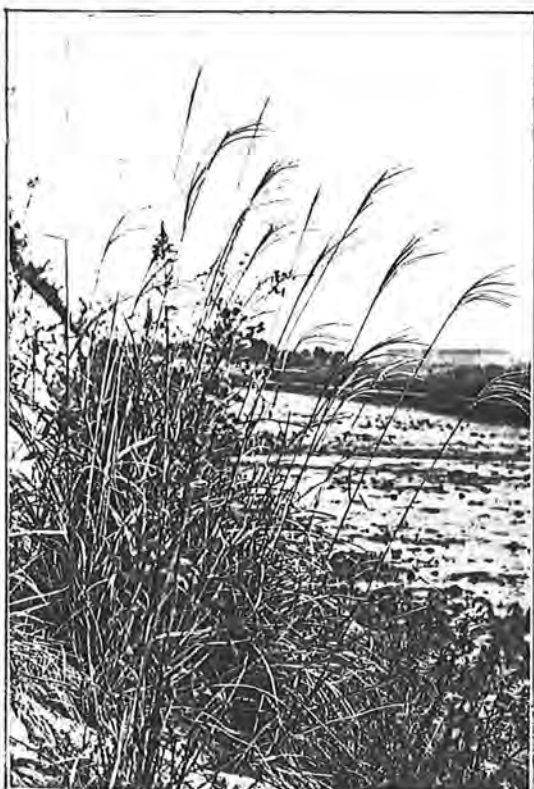
原稿は「オレンジページ」(ダイエー)11月号より。





「おい、松の木、
しっかり生きて
よ。よくここで
育っているな」
と、そんな励ま
しの言葉をか
けていたのです。

石垣の間の生命力
いつ根付いたのだろうか、この松の
木とススキ。他にも、マツヨイ草やウラ



「おい、松の木、
しっかり生きて
よ。よくここで
育っているな」
と、そんな励ま
しの言葉をか
けていたのです。

ギクとある。

ほんとにどおまあ、いきなり。とに
かくみなさん、聞いて下さいよ。
ある日、中村容子さんが、何かの話の
時、突然こんなことを言うんですよ。
「森田さん、こんなにクリーン作戦や
って来り休たのは、鼻がワルイ。から
よ。キッとそうだと思おうねよ。そり
やあ干潟を守りたいとか、ひとよりど
強いバイタリテッヤ「ふかんぞ」の想

いがあったと思うけど、それだけ
や出来なかつたと思つよ。続かない
わよ。それゆゑ、それゆゑも勿論あつ
たけど、鼻が悪くつてさ、普通の
人だったらがまん出来ないへドロ
や腐った生ゴミの中でも、なんと
かやってこられたのよ。今森田さ
ん体じゅう泥だらけでも平気でしょ、
でも、クサアライわよあ、だつてさ。

ここ、谷津三丁目前の護岸が作ら
れたのは昭和24年。今から31年前だ。
ゴミを引き上げる時、はつくばるよ
うにしている。して、この生命力

住宅・都市整備公団がクリーン
作戦に協力してくれました。
11月12日(水)にはバラ園前を、
又、11月17日(月)には、干潟の中央
にころがっていた直径2m程のドラ
ムを引き上げてくれました。
バラ園前は流れてきたゴミが、
10m×15mの三角の形でたまって

て、5人の作業員が半日かかり。
ドラムは、ケーブルやワイヤーを巻
く為のもので、泥と水がたくさんつ
いて重いものなんのって。先日森田が
ススキーで滑っていつて挑戦したが、
あんまり重くて大きいので、公団に
重機で引張ってくれよう相談し
たもの。公団はこれからは協力し
ていきたいとのこと。感謝。

「12月9日」・13年目の保護運動

ふかんど

号385

1986.12.1

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三一二五〇四一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 木村 三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

事務局0474-517076 中村 P.M.5時まで

あの時29才、今41才

谷津干潟は、「保存決定」とい
 う、現地戦争に勝った。(ちと
 言葉は良くないが)。

そしてこれからは、行政・政治
 などの、社会的法律的にバツク
 アップする必要が生じてきたので
 ある。

つまり、谷津干潟の保存計画・
 運営や管理方法、そして実際
 使用される予算が決まらうと
 ゆくのである。

この社会、私達が政治といふと
 のに無関係ではいられないのと
 同いく、谷津干潟とどうである。

特に、干潟の最終的な管理者に
 なる習志野市において、谷津干潟
 を利用する人はたくさんいる。(中
 で町会関係者や市議)。

しかし、現実的に実行し、面倒
 な諸問題を一つ一つ解決し、地を
 這うが如く傷つきながらと手を
 汚そうとする人間は、唯の一人と
 していないのが今の実情である。

つまり、プッシングする人間が
 いないのである。着手、実行、推
 進する人間がいないのである。

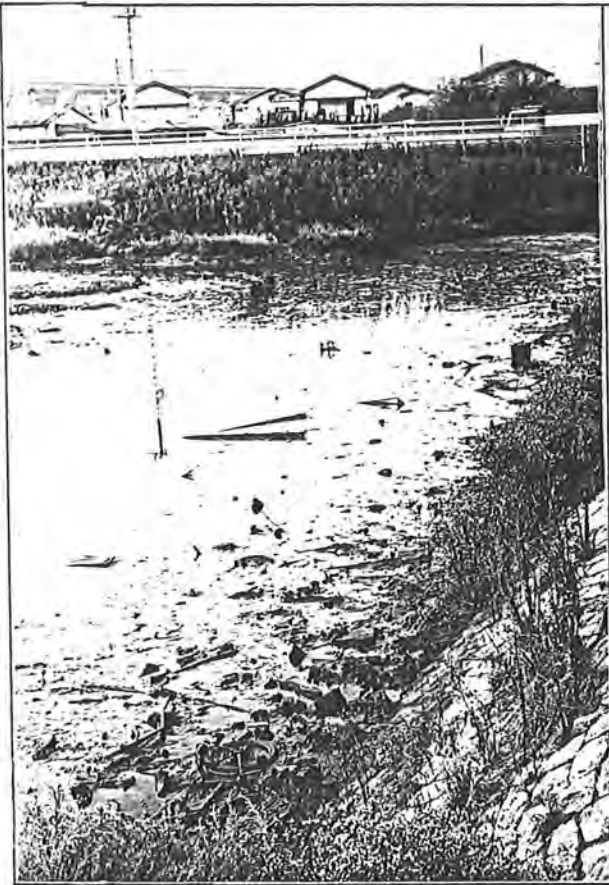
確かに、この「谷津干潟保存」と
 いうのは大仕事である。関係行政を
 多い。習志野市が生まれて以来の、
 最も大きな問題である。これから
 となりであろう。

淋しい限りだが、やったと人に思
 われたい、。やったと市民に言われ
 たい、という人は、ゴチャマンといふ。
 が、やる人間が、悪戦苦闘、奮闘
 努力する人間がいないのである。

閑話休題、固苦しい話や人の事は
 やつちのけにして、私達は楽しくや
 る。つまり面白い事を、面白くや
 る。汚いゴミを、キレイな
 心でやる。苦しい事を、愉
 快にやる。暗い事を、明る
 くやる。

とまあ、なあってこんなことを書
 くのと、今ここで、会員の皆様に、
 「我々の活動は今年の12月9日をも
 つけて、いよいよ13年目に突入せり。
 ついては会員諸氏の新たな決意や御
 意見は如何、」と試みて、「
 別に、今まで通り地道にコツコツと
 実践していただいよ、」という、言
 葉やお顔、返事しか頂けないうら
 というのが、今までの私の経験。

谷津干潟をとり巻く環境は、新たな世界へと移り動いていっています。



さらに西へは、どんづまり
写真上の所は、干潟の西の端。
この所、谷津干潟が現在の形にな
って以来、つまり、昭和48年からその
まんまの所。が、まんまとは言っても、
当時からそのままというのではない。
なせなら、今日まで、ゴミをじゃ
ん／＼捨ててきた所だから。クリ



深まりゆく秋晴のひととき
谷津干潟には、いろんな人が来
る。谷津干潟には、いろんな時が
ある。いろんな日や季節がある。
同じ一人の人間でと、その日と

↑は、これからやる所。↓は、やっ
た所。小さなデコボコは、潟ス
キーでこいだ跡です。



ン作戦の手が及ばなかつた所。
きう30年以上と前の子供頃。チ
リーン／＼と鐘を鳴らし、
赤い旗を潮風になびかせて、キャン
デー売りのじいさんが砂道を、自転
車でヨタ／＼と走っていた所……。
今でも、懐しく憶えております。

の時にあって、その心持ちが様
々である。
私とそうである。この会報を
読んでくださるみるさんと、き
つとそうであろう。
そして会員に限らず、干潟に
来る人、通る人はみな、それぞれ
の思いにあつて、その心をたずさえ
ているのであろう。
谷津干潟は、一つの広場、一つの
舞台かと知りません。野鳥、草、雲、
潮の干満、魚、カニ、季節や風さえ
それぞれは、自然の「一つの絵言葉」
なる、私達への語りなのであろう。

ふかんど

第386号

1987.1.20

谷津干潟愛護研究会
 〒255 習志野市谷津三二二五〇四一
 電話〇四七四一五〇四四
 文責 木林 田三郎

会費年2000

倉川 立
 1974.12.9

事務局 0474-517076 中村容子



杭にはフジツボ、イソギンチャク、ワリガツク。潮溜りには、カニ、カレイ、ハゼなどが。

舟みちの名残り

「この杭、何だったんですか」とか、「何んでこういうものがあるんですか」と聞かれることがある。

写真のこの杭が立っている所は、谷津干潟の東側、津田沼高校の横である。約150メートル位にわたっている。

その昔、まだ漁が行なわれていた頃の、「漕」だった所である。この漕を通過して、ベカ舟や帆かけ舟が沖へ漁に行き、そして又、ここを通過して帰ってきたのであった。この漕のどんぶりまりには、池のように潮が溜っている。船溜りがあった。つまり、小さな港、というより「漕」があった。

「漕」というのは、川のような所で、潮が引いてまわりが全部干潟の砂地が出てき、この川のような漕には水が残っている所をいう。埋め立て前にはこの辺で、干潮時におよそ2キロ半の干潟が出た。だからこの漕がないと、舟は沖への出入りが出来なかったのである。文字通り、舟の通る「舟みち」だった。

目印・砂止めとして

舟みちであった漕は、当然ある程度の水深があって、時々掘ってといた。だから危険な所でもあった。「ふかんど」程ではないが、時には潮干狩りの人が溺れ死んだ。干潮時には川のように水があるのでその存在がわかるが、潮が来て回り一面が水面になってしまふと、どこがその深い所なのかわからず、足を踏み入れしなう。で、その境を示す目印でもあった。それと、つまり、まわりの干潟の砂が漕に流れ込み、浅くなって舟みちの役目をなさなくなるので、それを防ぐ為に土止めの必要があったのである。漕は、岸に近い所の方が深く、沖へ向って浅くなり、東京湾に消えていた。

「ふかんど」には3本の漕が通じていて、干満時には川のように潮が流れ入り、そして出ていくのであった。

この杭の所の漕は舟溜りの手前で遊園の前、東の方から「ふかんど」に注いでいた。

気を使っていらが

やはり、冷すのは毒なのだろ
か。左脚の足首からスネにかけ
て、重くて鈍い、何かよんだよ
うに感じになる時がある。

今から八年半前の六月、交通事
故で左のスネを砕いた所だ。で
も、軽くツンくと来た時などに、
さすったり温めると消える。

あの日は大蔵省に行く予定だ
った。急いで朝刊を配っていた。見
通しの悪い交差点で、生垣とヤブの
農道。相手は車、こちらはバイク。

いやホント、笑ゆんで下
さい、こんなるオレでぞ

つまり、干潟の作業をしない
である。ほんとにそうなのである。
顔を洗う時、ヒゲをそる時には
ツキリとわかる。何だか、人間が
“上品”になったみたいだ。

干潟の作業といつてぞ、ベンチヤ
草むらなど、干潟の上のオのゴミ
拾いや作業をしているぶんには、
あまりその違いは感じない。

が、いったん中に入って泥水に
ぬれ、肉体労働をするとどうだ
め。ッ、ふっくら、すべく”どころ

車はかるりのスピードが出ていた。し
かし、双方が安全確認を怠ったのだ。

単なる骨折でなく、大小の骨が砕
けた。医師はレントゲン写真を見せ
ながら、「かなりの時間がかかりま
すよ」と言っていた。その時の医師の
顔と写真は、今ではつきり憶えて
いる。生まれて初めてベッドに寝た。

干潟の泥や水にぬれるのも、夏は何
とこないが、寒い冬は毎年スネに異
物感があった。

この間、水の中で重いゴミを動か
す時、足場が悪く左脚をひねってし
まった。かばい過ぎたかな、と思ってい
る。

ではない。

何かの都合で干潟の中へ入らな
い日があると、その夜、体じゅうが
とつてもふっくらとしている感じ。

たとえばヒゲをそるにすると、作
業した日はしななかった日よりも、カミ
ソリで血を出してしまふことの方が
ずっと多いのである。

顔を洗うのに、手で顔をこする
のであるが、その時でぞ、作業しな
い日は顔が丸見をおびて、ふくらん
でいる感じ。何日も続くと、「森田
さん、太ったね」と言われる。げんに体
重が増え、髪をやわらかい。

それだけに干潟の作業は、肌や指、
髪の毛を痛めるのであろう。

あんなことやこんなこと。人間、物事、その心。いろんなものを乗せて、クリーン作戦は前進する。

みんな、谷津干潟はね、君達のそのなんだよ、いいかい



お母さん達も、10mぐらいの長さの流木をエッサエッサと。



住宅公団と団地建設協力会から
と6人が参加してくれました。本
格的な作業服で心強かったです。

観察より、干潟の中がいいんだって。

十二月五日午後一時。谷津小四年
生のみんなが干潟にやって来た。お母
さん達と遠慮しかちについて来た。
昨年は教室で話しをしたが、今年
は干潟が教室。この日の先生は森田。
社会科のコミュニティゲストとして、

学校で話しをしたのがきっかけ。
教室じゃ物足りなくて、いよいよ今
年は現地で、森田が体験したことさ
子供達にと体験させたいというのが
先生の考え。「地域と開発」で、干潟
と森田が教材だということです。



4年生百三十余名が「いそしぎ」の
前に集合。干潟のゴミ拾いは初めて。

子供って、こういう所が大好きな
んですね。でど、数のカッてすごい
とんで、そのの見事にきれいになったよ。



ふかんど

オ387号

1987.5.5

谷津干潟愛護研究会
〒256 習志野市谷津三一二五十一
電話〇四七四一五一一五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

事務局 0474-51-076 中村容子



「あぁーん、長靴が抜けなくなっちゃった、助けえ」。悪戦苦闘のドロの中。ガヤガヤするうち公団の人が軽々とヨォーイショッ。

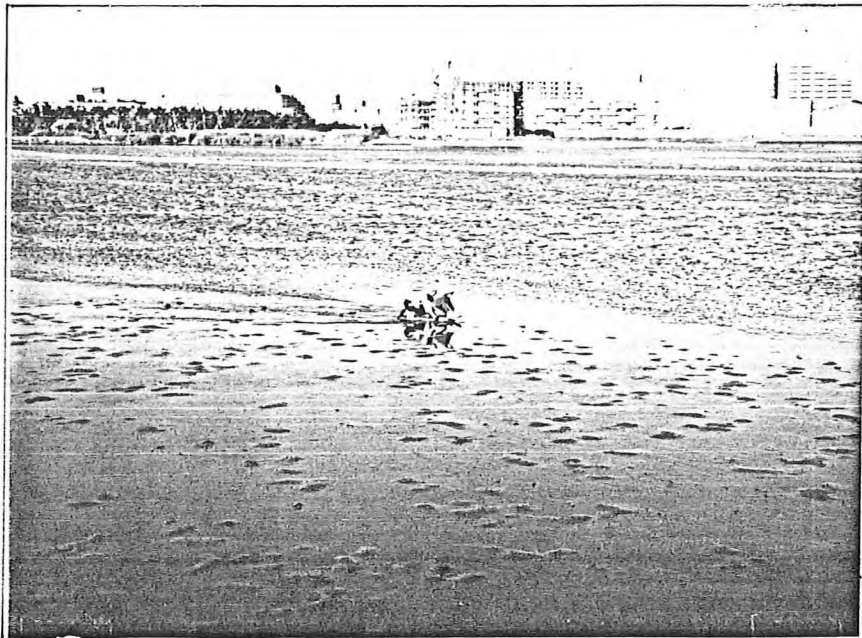


「ねえーっ、この赤い長靴だれのぉー？」と、おかあさんがみんなに呼びかけていた。みんな干潟に入ったのは初めてで、いささか興奮気味だった。



あれえー、きみは何やってんの？赤い長靴がドロだらけ。干潟に入るのは初めてだもんね。草の葉でしごいて、小さな手でドロを落していた。

すみわたった空の下、ひろーいひろーい干潟の上を子供を乗せて漕ぎ。スイースイーと気持ちよく。



谷津小の子供達よ、よく干潟に来てくれたね、ありがとう。森田はね、信じてたよ。いつかはきっと、学校で、君達のような子供が来るということさ。十年前、森田は、組んずほぐれっ行政と闘い、少しずつ干潟をきれいにながら、運動を持ちこたえていれば、谷津干潟は必ず見直されると信じていた。



この子、アダ名は「チョロ」。ドロだらけのくつ下と長靴をぬいで裸足ん坊。冬空で子どもは元気だねえ。

草むらでのかたらい

アシ笛が吹けるようになりました

ふがんど

ネ388号

1987.7.13

谷津干潟愛護研究会
 〒275 習志野市谷津三二二五十一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9



谷津干潟は生きた教科書だ。
 高橋みかちゃん、天野道子ちゃん、塙加奈ちゃん、吉田佳代ちゃん、前田由香里ちゃん。

ヨシ(良し)とアシ(悪し)は同じ。ただ言葉のひびき方で西方できたのでしよう。
 五月下旬。春の運動会をすんで、谷津小(五年)の女の子達が来ました。それで、アシ笛の作り方を教えてやりました。
 今を盛りにも、真っ青なアシがぐんぐんのびていた。今度、アシの葉で舟を作ろうね。

憎まれもののヨシだけど

ゆえみまさん、あたしの言うこと聞いてよね。オオヨシキリにバンヤカモ、ヨシゴイ達が巣を作る。

アシハラガニやベンケイガニ、とくにカニの赤ん坊の恰好のすみかです。外敵や波や風を防ぐので、カニがたくさん産卵するのです。おまけに干潟を耕すんですよ。

初夏の草むらはGOOD

空にはヒバリがパイチク鳴いてらあ。セツカが「ヒツヒツヒツ」(のぼる時)、そして「ジャツジャツジャツ」(下る時)と、晴れた空、あたりにひびき渡る声で鳴く。後では風にゆさくと波打つヨシの先っぽに、オオヨシキリが赤い口をあげ、「ゲケーチゲケーチ、ヨシゴでおけつ突っついてアイテテエーッ」と、あっちこっちで唄っている。

左から、山岸弘夫さん、中村容子さん、佐藤康子さん。のどかなあー。



うれしいなあ、テレフォンカード！

谷津小学校のみんなと

谷津小大好き

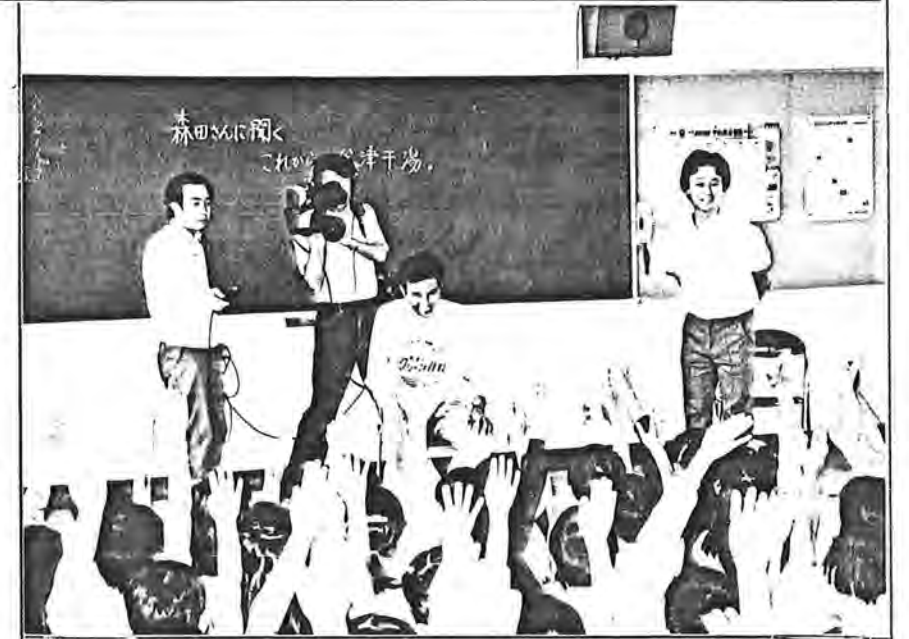
私が小学校四年の頃だから、もう三十年以上も昔だ。宮本小にいたぼくの遊び場の東側の境界線、つまり習志野市側は、今の船取線道路ぐらいだった。

その先、この谷津小あたりは「見知らぬ土地」だった。当時はただっ広い畑や野原所々に林があり、そして沼とあって、その中にポツンと不造の谷津小があった。ある日私は「探険」に来たのだ。弓矢とパチンコ、そして食糧のくずパンをを持って。ああ、なつかしいなあ。



五年一組の田宮さくらちゃん、運動会（多）での写真のテレフォンカードをプレゼントしてくれました。右は友達の森本さん。田宮さんのお母さんに感謝。

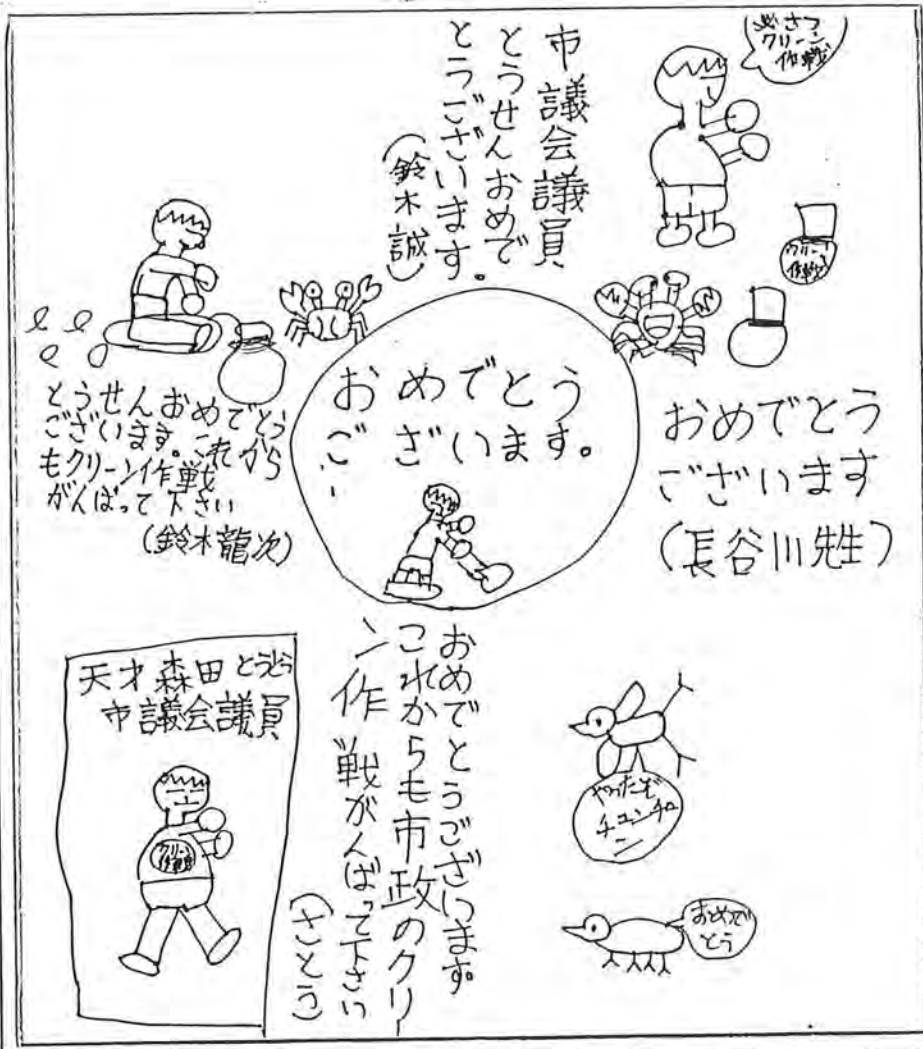
さくらちゃんはお母さんにカードを使ってと言っけど、とったいなくて使えません。



5月16日(土)だと思う。視聴覚室で5年生の全員と話しをした。議員になってとクリーン作戦を続けるのかなど、みんな干潟のことが心配らしい。

色紙をありがとうございます

選挙が終って向さな頃、五年生の男子三人が家に来た。顔はよく知っている。鈴木誠くん、鈴木龍次くん、佐藤洋平くん。当選祝いに来たという。はじめはちよんとかしこまて座っていたが、そのうち私の家の中を「探険」しだした。



谷津小の児童達からは、たくさんの励ましの手紙、お祝いの手紙をもらいました。みんな宝物です。

おてんとう様、今日とよくがんばって照りつけましたね...

ふかんど

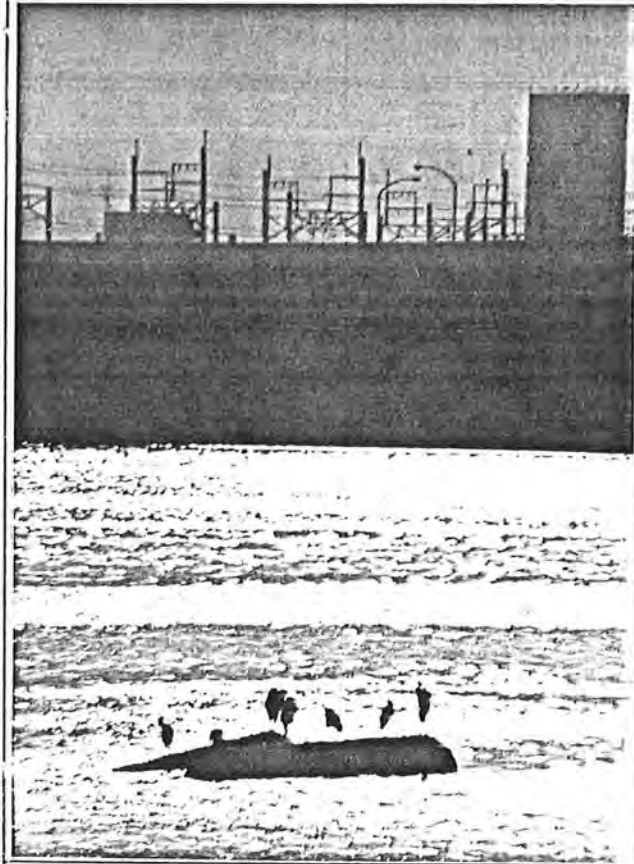
第389号

1987.7.7

谷津干潟愛護研究会
 〒275 習志野市谷津三二二五-11
 電話〇四七四一51-5〇四四
 文責 森田三郎

会費 年2000

創立 1974.12.9

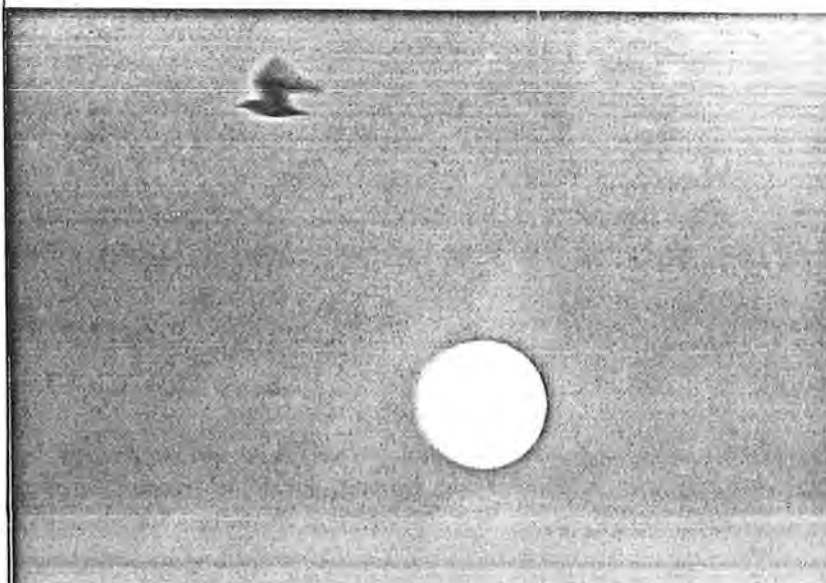


あのサギたち、何を考えてんのかなあ。
 赤茶びて、ホロくのサンドパイプ。埋め立て工事で使った後、捨てられて流れついたもの。穴があいてカキやフジツボがびっしり。干潟の移り変りを見てきたんだ。

写真 は 7月11日(土)

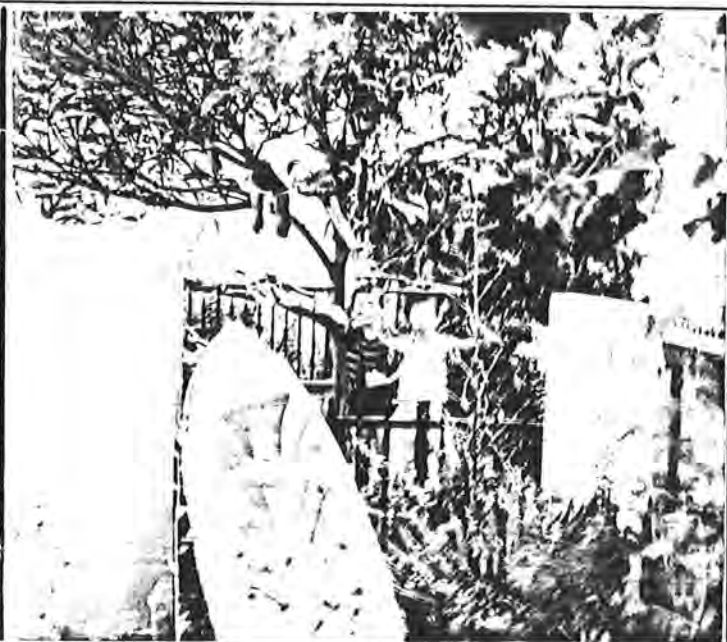
.....わたし達大人が、西の空に赤く染って、沈んでゆく夕陽を、ゆっくりとじょじょと見つめなくなってきたから、どう何十年と変わるのかなあ.....
 なんだかどう、ずいぶん遠い日か流れたよ、うな気がします。いつそいつと、せかせかするが、いそいそとやりすごしているばかりかしみたいたが。

中々こうい
 う日はなくて
 ぬえ。
 今日はずい
 よく出ていた。
 おてんとう
 様も、こう毎
 日がしく照
 ってた、疲れ
 んだらうなあ。



毎日く、そそくさと、目先のことばかりに多大のエネルギーをついやし、そこはかたなくあるむなしさがこみ上げてくるのです。
 その昔、古代人があの落日の彼方、西方浄土を信するの想い、心情がわかるような気がします。もしかしたら、大人の夕陽の百日は、幼き日のそよ風の、一日にも

及ばないのではないうか.....
 としうだとしたら、不思議だなあ。経験と知識と考え方を、教育とつばい身につけていくはずの大人が、これといってどういふものを殆んど持ち合わせていない子供の時の方が、よの中身が濃いなんて。
 そんな夏の日の谷津干潟でした。



家の前のビワの木。キリなしにです。奥がよくなるので、水を浴びてパンツ一枚で寝っころがってると、「森田三郎さん、あーん、ビワの奥とていいですかあつーと。そんで、あつちだこっちだと、そのにぎやかなことー。

「森田さん、これ読んで。あたしあんまり似てるんでびっくりしちゃってぬえしと佐藤さん。さしかしたら森田さんのことじやないの？」と。

私の前に中村容子さんと読んで、出た。が、その人ど本の行方では、「へっえー、いたんだぬえー、みからないとの返事だった。

孔版二十四頁の、世にもお粗末な追悼集である。奥付がなかった。孔版も素人が暇をみつけて手がけたものらしく、汚なく読みづらい。鈴木正という人はこういう人であった。

町の外れのシンノ池は昔は湧水の清冽な人々の憩いの場所であった。それがいつの頃からかゴミ溜めと化し、池の面影が消えてしまった。鈴木正は日備取りであったが、仕事が終わるとひとり黙々とこの巨大なゴミの山を片づけはじめた。彼を見た人々の誰もが酔狂な奴がいるものといふがかった。彼を馬鹿にする者もむろんいた。金稼ぎの一種かと推察する手合いもいた。彼の目的が皆目わからなかったのである。いじわるする輩もいて、彼が拾っている傍にわざわざトラック一台分の汚物を放棄した。鈴木正はしかし文句もいわず、雨降り風間、ひたすら孜孜とつとめた。やがて本来のシンノ池が現前した。やがて満々と水をたたえて池としてよみがえった。さまざまの野鳥が集まってきた。風景が一変した。町はこの池周辺を風致地区に指定し、遊歩道や柵をこしらえて公園風に整備した。子供たちは大喜びで野鳥を観察したり、浅瀬で水遊びを楽しんだ。足でさぐるとアメ色のかわいらしいシジミも取れた。

その中の子供がふと親に聞いたというのである。「ここでゴミひろいをしていたおじさんはどこへ行ったの？」

さんが指さした。

鈴木正は三疊間の破れ畳で、誰にも見とられずひっそりと病死した。寒中、水につかってゴミ拾いをしたために体を痛めたのである。枕もとに一冊の安直な野鳥図鑑が開かれてあった。

鈴木正というのは実は本名かどうかかわからない。年齢もはっきりしない。どこで生れてどう育ったのか一切わからない。身元が全く不明なのである。

人との交際がなかった。酒も煙草もやらなかった。日雇いで得た金は、シンノ池のゴミ処理にすべてつぎこまれた。ゴミを捨てるのに金を取られたからこそ、町民の誰かが間に乗じてシンノ池に不法投棄していたわけである。冷妻が好物だったのか、あるいは主食であったのか台所に干麺が二百把も残されてあった。冬だというのに蚊やり香をともしていた。

この追悼集は、「鳥になったのよ」と子供に答えたお母さんが音頭をとって、十七人の子供たちに「ゴミ拾いのおじさん」の姿を、詩や作文に書かせて、それを一冊にまとめたものであった。

「ごみをすてていけません。ことりさんはなきました。ごみをすてないでください。ことりさんにわられます。ごみをのぞいたらことりさんのおうちでした。はやくさがついでよかったです。おうちがよごされていやでし

た。たぐさんのことりさんがいないいます、いまうれしくていないのです。たのしくてないのです。」(きくちともこ)

「ごみひろいのおじさんはきたないと忠勇くんがいった。きたない事をしているからきたないといつた。おじさんはきたないかつ、こをしいたし、みんながきたないいうし、おとなもいので、ぼくもそうだと思った。ごみは人間のかすだ。だからすてる。それをひろうのだからきたないと忠勇くんがいった。だけどひろうのがきたないなら、すてるのもきたないと思う。そういうと忠勇くんがぼかだなあおまえといつた。みすずおばさんに話すとはとわらわれた。おじさんがしんで、ごみひろいのおじさんはえらい人だと先生がいわれた。みすずおばさんもそういつた。ごみはきたないけどひろうのはきれいさと忠勇くんがいった。すてるのもきれいということ？」という忠勇くんは、ううといつた。」(小堀正史)

発行人の名義もない、この小さくて貧相な葬式饅頭は誰に配られたのだろうか。誰に食わせようと作られたのか。無責任な大人か、ぬけのない町当局者か。

饅頭本の読者というものは、もしかすると人間だけではないのかもしれないのである。(でくねたつろう「芳雅堂」誌)

佐藤康子さんが見つけ、私に教えてくれました。

わあーっ、卵がいっぱいだよ！

ふかんど

オ390号

1987.8.25

谷津干潟愛護研究会
 〒250 習志野市谷津三二二五十一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 木村田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

夏休みと近ずいた七月の日曜日、谷津小五年生の子供達が七人やって来た。

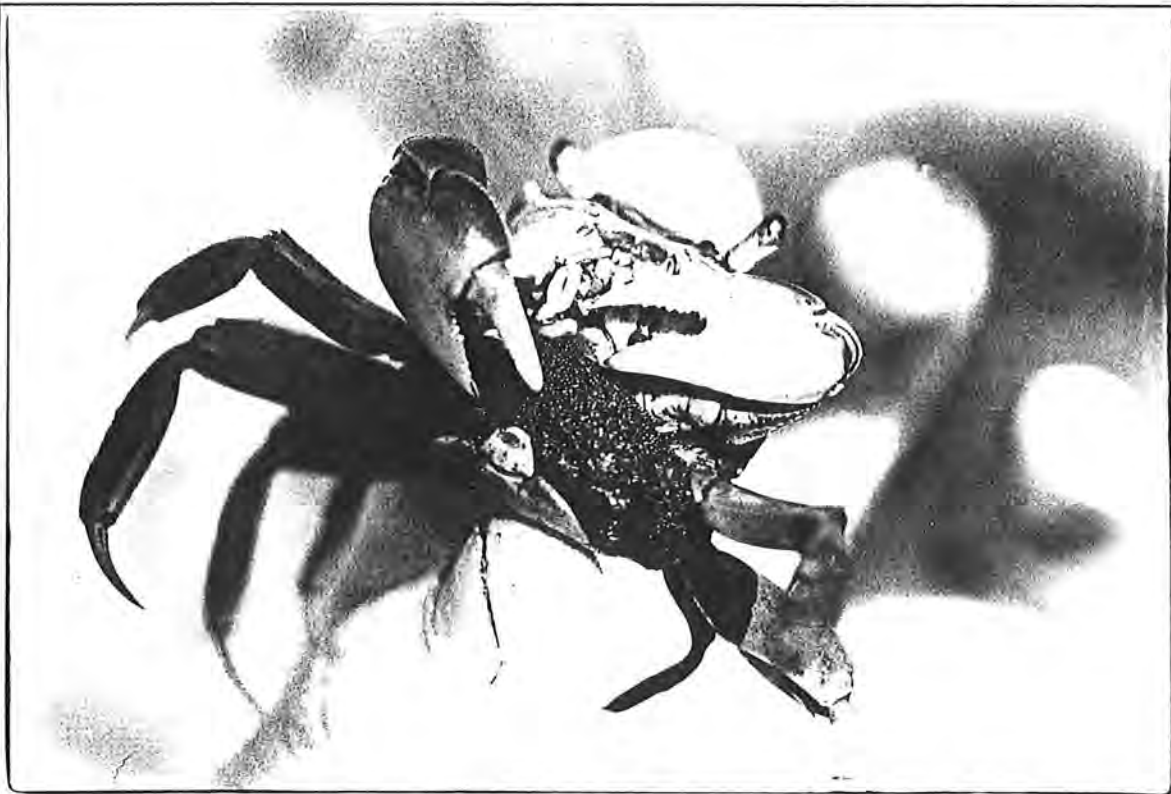
奥は、森田の誕生祝いに来てくれたのである。昭和20年7月7日生まれ。だから、私の頭の中は、いつも「セタ」なのであろう。

この子供達と初めて知り合ったのは去年の12月。以来干潟にはなんだかんだといっっては、三々五々ともよく来てくれる。

この日も、着替えや弁当、お菓

子などを持って来て、いろんなことをしていった。カニをつかまえるのにも上手になった。初めは、カニさえも近に見たこととつかんだこととない子とかなりいたのだ。でも今は、カニがいそうな所を知っていて、干潟に下りてはガサゴソしていたかと思うと、たちまちいっぱいつかまえてくる。

写真にはアシハラガニ。持っているのは鈴木龍次君、佐藤洋平君といっしょにつかまえたという。女の子産もまわりを囲み、「何だ〜と〜とさわいでいた。「これ、みんな干潟で産まれるの〜」とびっくりしていた。



→ ヨチ〜く歩きの女の子。親にせがんで袋の中のカニをじっくりと見ている。

↑ みんな初めでびっくり。観察してから干潟にそっと放してやった。

矢島めぐみちゃん、根本桂子ちゃん、鈴木龍次君、佐藤洋平君、スイカとハンカチありがとう！

そうです。まさに習志野市民に、その審判を受けようとしたものです。

谷津干潟と森田が、過去13年間の運動が、習志野市民に向いかけたのです。

「みなさん、あなた方はどう思いますか？、どうしたいのですか、さあどうぞ、決めて下さい。みなさんの意志をなくして、谷津干潟の保存はあり得ないからです」と。

ユリカモメを通じ、谷津干潟を大切にしたいのです。被害さえ加えなければ、手からでも直接ついでいこうよつになりました。

私達はそれを知って欲しかった。見せて、やらせて、市民に実証したかったのです。

千葉日報 1987.7.18

法人タクスの乗務員が習志野市議選にトップ当選―13数年、地元・谷津干潟の愛護・自然公園化を唱え続け、その実現に努力してきた森田三郎さん(四二)船橋市・ハト交通勤務。今、森田さんはタク乗務員、市議会議員、谷津干潟愛護研究会会長の三役をこなす忙しい毎日だ。



森田 三郎氏

年代にはゴミの投棄により、人死の姿を知らしめた。この干潟を甦らせたのがタク乗務員の森田さんだ。

干潟愛護唱え市議当選

一人三役の森田三郎氏(船橋・ハト交通勤務)

眠された新聞を読んだのがきっかけだった。その写真は森田さんの記憶を甦らせた。幼い頃、また谷津の海が広く豊かだったころに遊んだ記憶だ。だが、現実に見た干潟は「干潟池」。辛うじてカニや貝が生き、鳥が

ながらの作業。干潟の面積は日比谷公園の二倍ほどある。当時、新聞販売店に勤めていた森田さんは朝刊と夕刊の配達以外の時間、市川から谷津干潟までバイクで走り、ゴミを拾った。ゴミとヘドロにまみれる森田さんに手を貸す人は

他のりかなる組織、団体に相談もしなかつたし、応援や協力の要請もしませんでした。

団体と言つにはあまりにも小さな私産、そして、近所の父ちゃんやん、常日頃森田を励ましてくれる人産と、力を合せて戦ったからです。ありがとうございました。

寒い冬の間、毎日私達にパンをくださいましてありがとうございました。皆さんのパンのおかげで元気いっぱい寒いシベリア目ざして旅立ちました。秋には可愛い子供達と一緒にまたここへ帰ってきます。まだパンをもって私達に会いに来てください。今いるシギやチドリたちは、パンを食べませんが皆さん可愛いがって下さい。私達も、パンを空中でキャッチした楽しい話や、多くの人ガ力を合わせてゴミを拾い、きれいになった谷津干潟のことなど、シベリアのたくさんの仲間と話してあげようと思っています。では又、皆さんに会える日を楽しみにしています。

ユリカモメより。

追伸 私達は子供達に石を投げられて悪い思いをしたことが何度もありました。私達通り鳥は長い旅の途中で疲れた体をいやすために、この干潟に立ち寄ります。そして栄養を補給して、また旅を続けるのです。みなさんは、けって石を投げたり、ジュースの空き缶やゴミなど捨てたりしないでください。又、そんな子供達を見つけたら注意してあげてください。自然がギッシリ詰まった谷津干潟はみんなの宝物です。美しくまもりましょう。そうすれば多くの渡り鳥の仲間がみなさんに会いに来るでしょう。お願いします。



ユリカモメが「お礼の手紙」

掲示板がまた話題

習志野市 谷津干潟

「毎日、私達にパンを下さいましてありがとうございます。みなさん、お礼の手紙を書きました。」

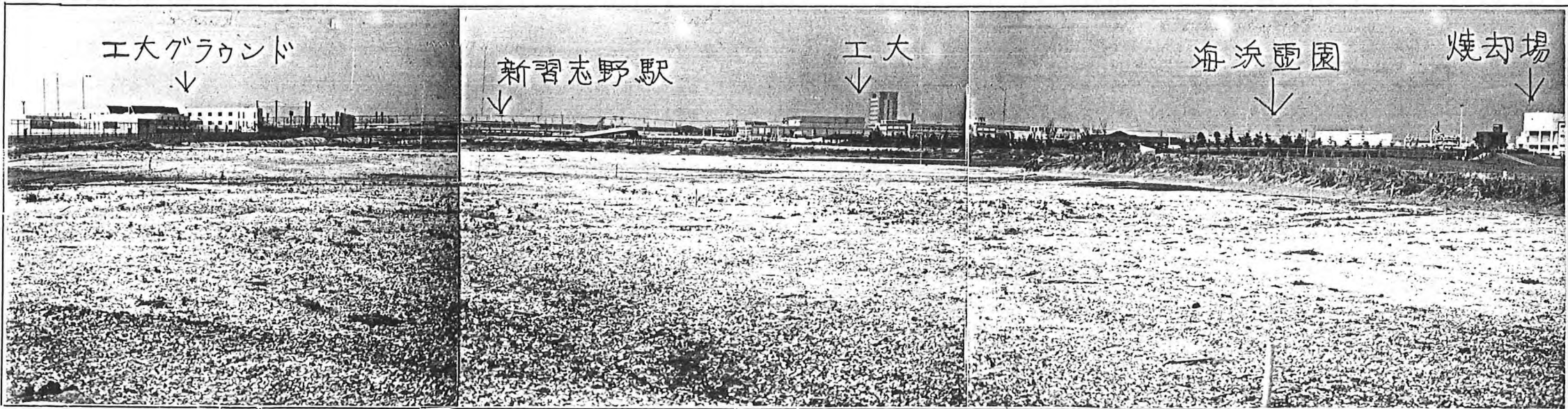
習志野市秋津の谷津干潟護岸に、遠くシベリアのユリカモメからという、こんな手紙形式の掲示板が立てられた。

「お礼の手紙」は北の国へ帰ってしまつたユリカモメに書きをやらうとパンを持って訪れる人は後を絶たないという。そこでこの話を知る人の筆で「ユリカモメは不在というユニークな看板が立つた。」



「秋には、かわいい子供達と一緒にまたここへ帰ってきます。そのときまたパンを持って私達に会いに来て下さい。」

コアジサシと共に (1)



ふかんどい

※391号

1987.9.1

谷津干潟愛護研究会
 〒275 習志野市谷津三二二五-11
 電話〇四七四-5115〇四四
 文責 森田三郎

会費 年2000

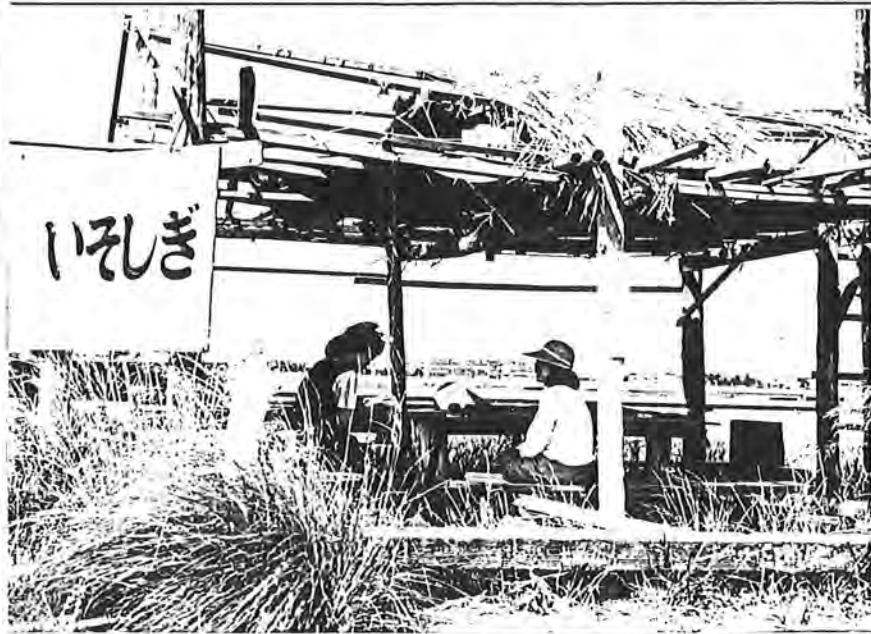
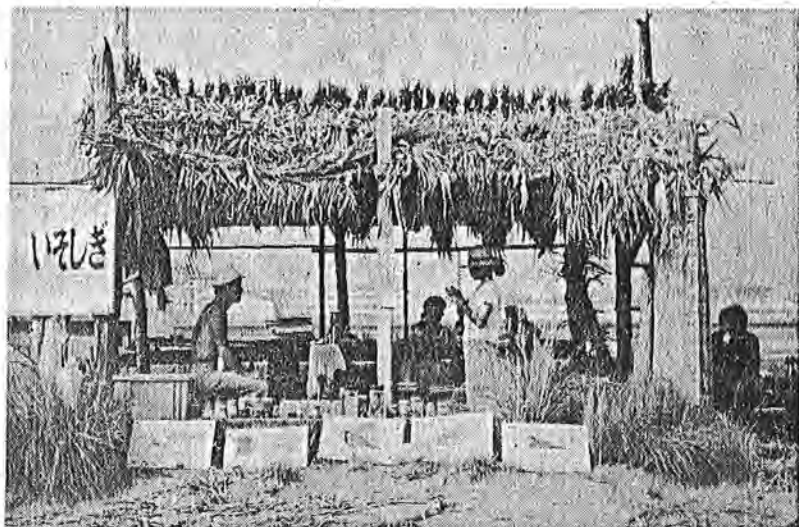
創立
1974.12.9

一九八七年 コアジサシ・シロチドリ・コ
チドリ繁殖調査

そう、コロニー（集団営巣地）は見られな
 いと思っていた。しかし、偶然にも、土砂を
 くみ上げて小高くなっている所が出来、そこ
 にコアジサシたちは集中して巣を作った。
 場所は、習志野市茜浜、菊田川河口の右
 岸である。一昨年の冬にしゅんせつしていたの
 で、目星をつけていた。今年の冬にも、谷津小
 の高杉君、湯木君、佐藤君を連れて貝ガラ
 拾いに来て、下見をしておいたのである。
 今年初めて調査に行ったは五月上旬、選挙
 が終わってから向もない頃だった。まだ埋め立て
 地の緑も少なく、風のある日はうすら寒かっ
 た。「どうか作っていてくれ、少しでも多く営
 巣してくれー」と、願いをこめて行った。

まず見つけたのは
 シロチドリの卵。シ
 ロチドリの産卵は、
 コアジサシよりも約
 一ヶ月早い。
 写真は左から山岸
 さん、佐藤さん、中村
 さん。まだジャンパー
 を着ていた。さて、こ
 れからが楽しみだ！





作り直前の「いそしぎ」は、ごらんのようにオンボロボロ。子供産がヨシを引き抜いて干潟にさす為だ。



汗だくで大奮闘の大滝さん。イヤホントに、夏の日中のヨシ野の中は、まさに「炎熱地獄」だ。

すっかり干潟の名物に、シムボルになった

最初に作ったのは、昭和54年でした。多い時は八軒づつ程作った。

当時はずい分イタズラもされたが、その後だんぐとなくなってきた。その頃はまだ谷津遊

園もあって、この小屋の季節になると丁度、ハワイアンのバンドが対岸から聞えてくるのだ。それをヨシの葉ずれの音と共に聞きながら、私はパンツ一枚の姿で寝ころぶが、夏空の入道雲をただひとり、ホッネンと見ながらいろんな思いにふけっていった。

砂漠のオアシス 屋根をふきかえ

津干潟の小屋
日除け

猛暑の中、小学生ら大活躍

習志野市の谷津干潟に、照りつける強い太陽の日差しを避けるための日よけ小屋Ⅱが真Ⅱがあります。

この小屋の屋根のふき替えが、このほどこの小屋を造った人たちが小学生の手で行われしました。

この小屋の名前は「いそしぎ」。日よけ用にと谷津干潟愛護研究会と谷津干潟友の会の手で造られたのですが、材料は流木の丸太などを使って組み合わせ、付近に自生した屋根の下で、サヤサヤとア

シの葉すれの音を聞きながら子供たちの表情は、汗を流ら、麦茶でのどをうるおし、した後の満足感でいっぱい出来たばかりの屋根を見上げた。習志野市・中村登子

「いそしぎ」は教材としても、将来も作り続けていきたい。



谷津干潟の保護の為、家庭の台所にも広げたい

ちば市民生協 1987
「虹のひろば」 9月1日

谷津干潟の大きな負担となっているのは、百パーセント台所などの家庭排水です。これからも、主婦の方々の協力が重要です。

ふかんど

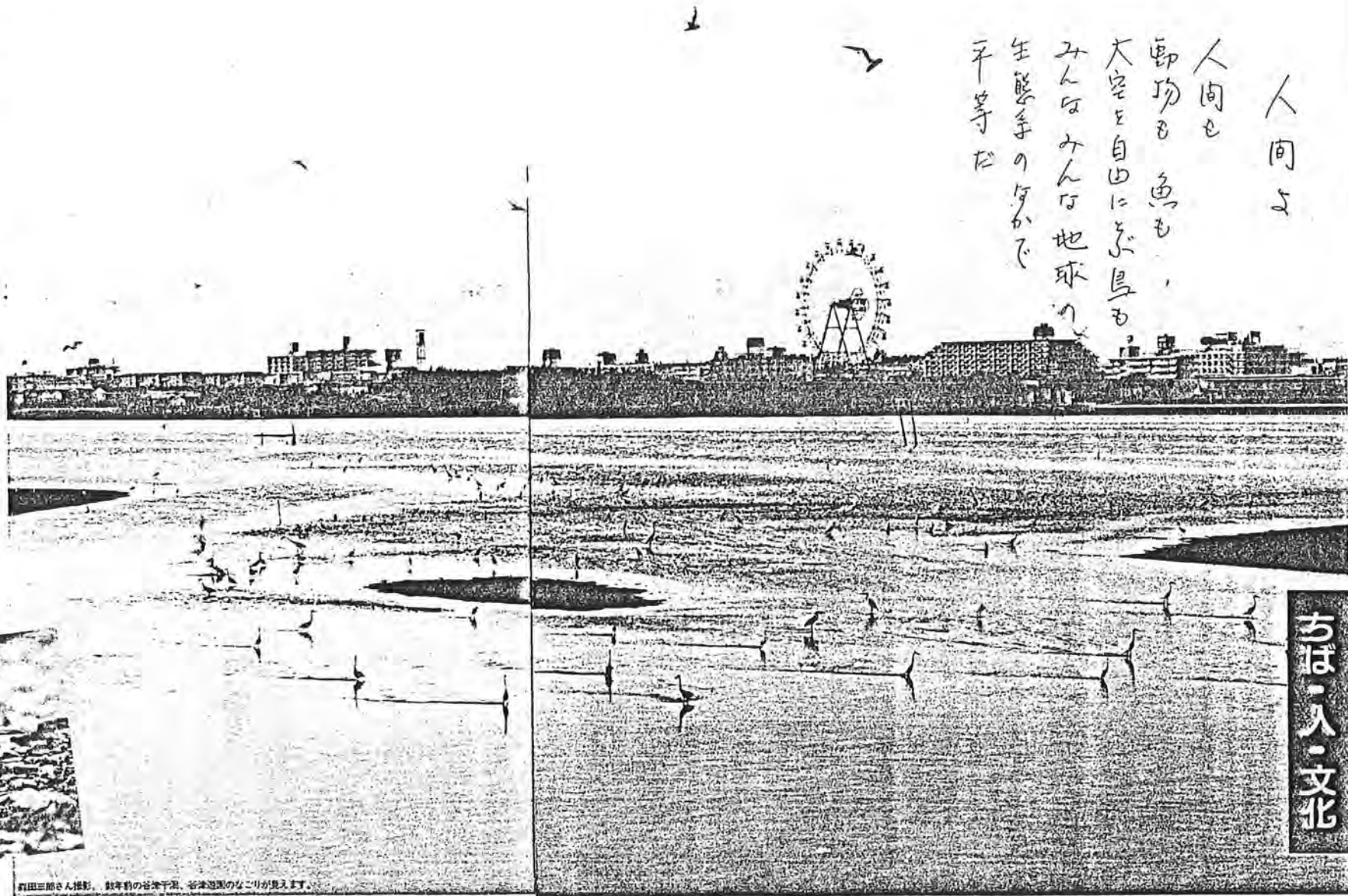
オ392号

1987.9.10

谷津干潟愛護研究会
〒275 習志野市谷津三一二五-11
電話〇四七四-5115〇四四
文責 森田三郎

会費年 2000円
創立
1974.12.9

人間よ
人間も
郵船も 魚も
大空を自由にぶらぶらも
みんなみんな地球の
生態系のなかで
平等だ



ちば一人文化

森田三郎さん撮影。数年前の谷津干潟。谷津周辺のなごりが見えます。

「ふかんど」(谷津干潟)
「ふかんど」は習志野市の西南の
はずれにあり、西は船橋市に接し、
国道二九六号線、東は東立津田沼高
校、南は東京湾岸道路、北は谷津遊
園跡地(パークシティー谷津三丁目
団地)に囲まれた、長方形の水面の
昔の呼び名です。「ふかんど」とは深
いところという意味で、昔、この辺
りが浅い海だったころ、潮が引い

谷津干潟は、JR津田沼駅南口より新習志野行
バスで「津田沼高校前」下車。右折し、津田沼
高校の裏にあります。



この辺り一帯を野鳥観察のできる
公園として整備し、昔のような干潟
にもどした。そうしなければ干潟の
なまかな(ニ、魚、貝、虫たち)
に済まないのだと言ふ。
九月から五月にかけてこの干潟は
鳥でいっぱいになる。豊富なエサを
求めて北から南から飛んてくる鳥た
ちのエサ場、食堂なのだ。
森田さんと、干潟のなまかに会い
たかったら、日曜日午後、干潟を訪
ねてみてください。多分、先頭に立
って一番の汚れ仕事をしているのが
森田三郎さんだから。



この車で野鳥を見れば、
森田さんとひと目でわかります。

係官庁も協力して、今の谷津干潟が
復活した。
いたずらっ子だった昔を語る森田
さんは、子どもがそのまま大人にな
ったかのような少年の香りがする。
「しこしこは、タクシー運転手と市
会議員。干潟は、菜っつて言えば分
るかな、もう離れられない。前世に
よっぽど悪いことしたんだねえ。」

昭和四十九年、埋め立て地の中に
わずかに残って、粗大ゴミや生ゴミ
の捨て場となっていた干潟を見て、
幼いころからの遊び場であった干潟
のあまりの変わりように驚いた森田
さんは、一人で黙々とゴミを拾い始
めた。新聞配達の仕事のあいまに市川
からバイクで通って干潟のゴミをさ
らう姿に、だんだんとなかまも増え
最初は知らぬ存ぜぬをきめこんだ関



十二年前から、
ゴミで埋まっていた
谷津干潟のゴミを拾い続け、
現在の野鳥の楽園に変えた
谷津干潟愛護研究会会長
森田三郎さん。

機干のシギ、テドリが、せまい谷
津干潟の上を飛び舞う。夕陽をうけ
て、紙吹雪のようだが、ここには、往
時の面影はない。追われ追われて彼
らは、このせまい所に押し込められ
たのだ。その有様は、干潟の想い出
の呼び水である。その時ほど、彼ら
を守ろう、谷津干潟を残そうと、強
く、深く思ったことはない。
— 森田三郎 —

どうやって入って来たんだか

ええ、ちゃんと。レッキとしてすんでます。ピンくくしてます。

その証拠に、私が風呂のドアを開くと、すばやく走って逃げまわります。マットの上を、どういつしやうけんめいに、カシャ、コンッ、と音を立てて隠れる。

勿論、さすが湯舟の中に入っ

て体を洗いませんけど……。初めはゴキブリかと思ったが、その後何十回も見た。だから、今ではこころ見ないと、「あれ、どうかしたのかな、死んじやったのか、つ」と心配になってくる。が、驚くには値しない。我が庭にも玄奘にもいるんだから。

谷津小四年一地域と開発

教室で、直接子供達と話しが出来るなんて幸せだ。

10月8日頃。コミュニティゲストとして、「習志野の海の移り変わり」というのがテーマ。

今年で3年目。こういう形で子供達と接していけるのはとっても

うれしい。これからは長く続くことを願っている。

こうして少しずつ、地域で谷津干潟を支え、とけ込み、守っていかると、今までどおほど望んできたことが……。

ノリを作り、アサを取ってたん、農業と、4人ぐらいの人が教室で話しをする。

石橋雄吉氏より、カンパ二千円と七十円切手100枚を頂きました。

石橋雄吉氏は会員の宮川郁子さんのお父さんでいらっしゃいます。

沢辺精士君の夏休みの宿題の為に

宿題の為に

とにかくそこにはメダカがウジヤ

くいる。今から8年前、会員の藤田さんが、幕張の埋め立て地の水溜りに放したのが、いつの間にか大繁殖したのである。

夏休みに入ってからすぐ、谷津小五年

の沢辺君から電話があった。

「あのー、永本先生から聞いたんですけど、森田さんがメダカのいる所を知ってるって。そんで、あのー、研究に使いたいですけど、お願いできますかあつー」と。

私は沢辺君にもメダカすくいと体験させてやろうと思ひ、さっそく二人ですくいに行きました。

……ところが後で、沢辺君からあははメダカじゃなくてカダヤシですって。

ふかんど

号393

1987.9.30

谷津干潟愛護研究会
〒75 習志野市谷津三二二五十一
電話〇四七四一五一一五〇四四
文責 森田 三郎

会費年 2000円

創 立
1974.12.9

さらば、我が愛車

ホンダライフ、昭和49年型、走行距

離25万5千5百Km。

9月26日(土)、とうとう「死」を宣

告せられました。

ボロくだけならまだいいが、こ
う車体が危険な状態になってい
ること。

昭和55年に中古で買い、ずいぶん
こき使って走りさせてきました。こ
の車ほど、埋め立て地を走ってきた
車と少ないだろう。

車の下のサビ止め
塗料も、普通の車
よりも倍ほど塗
ってありました。

西は荒川河口の
葛西から、東は千
葉市花見川河口の
幕張埋め立て地、
約三千kmを走って
走って走り回しま
した。

風と砂にも泥水
にと塩っ気があ
る。いたみが早か
たのでしよう。
愛車よ、お疲れ
さま。ご苦労さま。
ありがとフー。
急のこと、皆さん
にお知らせ申し上
げます。

野鳥愛好家が猛反対

「楽園」の 京成電鉄に質問状

野鳥の楽園として首都圏の愛鳥家や市民から親しまれている習志野市の谷津干潟の隣接地に、ゴルフ練習場を造るプランが持ち上がり、愛鳥家が反対の声を上げている。「巨大なゴルフ練習場を仕掛けるようなもの」「建設は一案に過ぎず、正式決定ではない」と両者の話し合いは平行線のまま。最近のウォーターフロント開発の中で、昔ながらの自然を大切にしている貴重な場所だけに、その周辺の利用方法が問われている。

練習場建設が検討されているのは谷津干潟愛護研究会が調査している谷津干潟隣接地の谷津干潟北東にある京成電鉄の調査田(森田三郎代表)の土地に。現在は市街化調整区域に組み込まれており、住宅建設などは事実上不可能となっている。同社ではかねてより遊休施設活用の一環として、この土地の利用を検討しており、今年四月、習志野市に、練習場建設について相談し、またその後、野鳥の愛好家



野鳥の楽園として知られる谷津干潟

驚いたのは森田代表たち。計画通りの練習場ができると、干潟の一面に巨大な壁が出現することになり、野鳥に対して、相当な影響があると思わなければならぬ。そして練習場の位置。練習場のネットに隣接する海面は、干潟で最も高く、水没時間の短い所。当然、干潟で最も野鳥が飛来する場所だが、もし練習場が完成すると、内陸部から飛来する野鳥の干潟への通路が大幅な制限を受けかねない。

また、鳥類は一般に不連続な打撃音を恐れる習性があり、練習場からの音は、照明とともに、野鳥の休憩を妨げるおそれがある。「谷津干潟の周辺は住宅や学校が多く、文教・住宅地であり、貴重な谷津干潟の自然とあわせて考えられるべきです」と森田代表。このため森田代表らは八月上旬、市長と京成電鉄に十五項目からなる質問状を送った。

これに対し京成側は「まだ未定のことであり、県や市の指導のもとに検討したい」と回答。市側も「谷津干潟は将来都市公園として整備したいが、当該地は民有地で指導に限界がある」と返答し、現在まで、プランは宙に浮いたままとなっている。

↑サンケイ新聞 1987.9.26

干潟をテーマにして

文化祭で

習志野三中の三年生。

秋の学校文化祭で、クラスのテーマに谷津干潟を選んだとのこと。

地域の学校で、干潟をこういうふうにとり上げてくれることは、奥によろこばしいです。
苦しいこと、楽しいこと、将来のこと、そ
れを生徒産に発表して感想を聞くらしい。

体操が二の回数

この調査は、全国的にまたいへん珍らしいと思う。

会員の佐藤康子さんの子供、洋平君(習志野市立谷津小五年)が夏休みの宿題でやったものです。
決められた時間に何回ハサミを上下に振るかというもの。チゴガニとコメツキガニで、気温が高いと早く、低くなると遅くなる。

身近かな生活の中に

県立船橋高校の女性徒。干潟のすぐそばの谷津ハイッに住む飯田早記さん。

私の後輩だから親しみを感じた。
谷津干潟を、身近かな生活環境の一部としてとり入れ、レポートする形で書きたいとのこと。飯田さん、アリガトウデス。

干潟を守る

千葉県習志野市の谷津干潟は、コヤシ、カキ、元有志グループや愛鳥サークルの「自然への熱き思い」が、頭の下がるのは「アラスカなど極北の地から立ち上った森田三郎さん」が羽飛来、水面で静かに羽を休めている。



この干潟を休養地とする渡り鳥の数は、近年減少の傾向にあったが、ここ数年再び増えはじめ、個体数二万羽を数える日も珍しくなくなってきたという。



開発の波に洗われて全国的に干潟や湖沼が削られ、野鳥の楽園が細っていく中で、逆に渡り鳥のコロニー(集団営巣地)としての機能をとり戻しつつある谷津干潟は、環境保全のモデルケースといえる。

「ゆくゆくはバード・ウォッチャーだけでなく、市民がこぞって憩える上野の不忍池のような公園にしてほしい」。浅黒く日焼けした森田さんは新たな運動へ向けて走り始めている。(亨)

夏の甲子園で谷津干潟が

習志野高校が
出場した時、地元紹介で谷津干潟が放映されました。

「干潟のある町、習志野高校……しななくて、とってもうれしいですわ。」

干潟は生活の一部に

森田三郎

私は、今度の地方選挙で谷津干潟保存をひっさげて立候補した。千葉県習志野市議選である。

そして当選した。市内の主婦や子どもたち、お年寄りが応援してくれた。その数は自然保護団体の会員数よりもずっと多かった。

私が最もうれしかったのは、今まで干潟の保存運動には直接かかわってなかった人たちが、谷津干潟を保存することの大切さ、そして運動を続けてきた私たちを認めてくれたことである。運動に参加しなくても、日々の暮らしの中で私たちを、谷津干潟を見守ってくれていたという確証を得たからである。

昭和49年より保存運動をしてきた。当時、形勢は全く不利で、私たちはごく少数派にすぎず、ちょっと特種なグループとして見られていた。

私は複数の、いわゆる自然保護団体の会員だった。しかしすぐに、運動と干潟周辺の住民の間に大きな溝があるのを感じ、思い知るようになった。私は団体から少しずつ離れて独立していくようになった。保存運動がいつまでも「運動」であってはいけなかった。

谷津干潟は私のふるさとである。幼年、少年時代を育てくれた所である。私は、今はゴミだらけで悪臭を放つ谷津干潟の身になって考え、行動しようと思った。「お前が谷津干潟だったら、何をしたいか？」と問い、捜し、答えようと思った。

その時以来、私は運動を運動としてではなく、生活そのもの、その一部にしてしまおうと思った。まず一人から始めることにした。仕事も住まいも最も保存に反対の強かった干潟のすぐそば、地域ど真中に移して、体で説得しようと考えた。日常生活の中で保存はごく普通のこととして、保存運動を地域社会に根付かせ、溶け込ませる為に私自身が先兵となり、コヤシになりたかったのである。
(タクシー運転手・市議)

これからと、ボソボソとやっています

ふがんど

オ394号

1989.5.1

谷津干潟愛護研究会
 〒25 習志野市谷津三二二五十一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 森田三郎

会費 年2000円

創立
1974.12.9

お前が谷津干潟だったり、何を
 して欲しいか。それをたずね、
 思ひ、そして成してきた。

〇谷津干潟の身になる〇と
 いうのが、すべての根底と信ずる。
 谷津干潟の、価値を固うより
 と、谷津干潟に対して、どんな
 価値あることができるかを固うて
 きた。それを大事にしてきた。

固われているのは、谷津干潟で
 はなく、奥に、私達自身である。
 受けるよりと与えることを。

利用するよりと、あることの為に
 利用されることを。谷津干潟が
 何をしてくるかよりと、私
 達に何かができるかが大事だった。

私は観た、会得した、そして信
 じる。谷津干潟がとと必要
 としているのは、評論家や裁判官
 や字真家やバードウォッチャーで
 はない。その負える重荷と、痛み
 を共ににらう人々である。

渡り鳥が飛来するのは、観察
 される為ではない。立派な観察
 舎があるからではない。又、字真
 をとって欲しいからではない。

谷津干潟がそれなりの環境で
 あったり、渡り鳥は呼ばずとて来

るもの。反対に、とし、それなりの
 環境でしかなかったら、たとえ願
 っても、呼んだとて来るとのではない。
 私達は、バードウォッチャーではな
 い。運動家でもないし、愛鳥家で
 もマニアでもない。谷津干潟と市
 民と、それを求めてもないし、必要と
 していない。

私達が残し、守りたいのは、谷津
 干潟それ自身である。会や団体の
 考え方、イデオロギーや方針では
 ない。記録や字真、活動経過では
 ない。ましてや、人や世論の評価や
 利益ではない。

想ひ、念ひ、祈り、努力と実践のみ
 私達のもの。そして、評価と価値と
 判断は他の人、後世のもの。明日を
 になう子供のもの。

私達がやってきたことは、運動や
 方針としてではなく、ごく日常的な、
 当り前の、自然な生活の一部としてや
 ってきた。一市民として、住民として、
 一人の人間としてやってきた。

いつしか、少しずつきれいになる。こ
 のほか、なんの理念と方針をいらない。
 有能な評論家よりと、愚直な
 実行者であらんとしてきた。

谷津干潟は生きた教科書、図鑑、

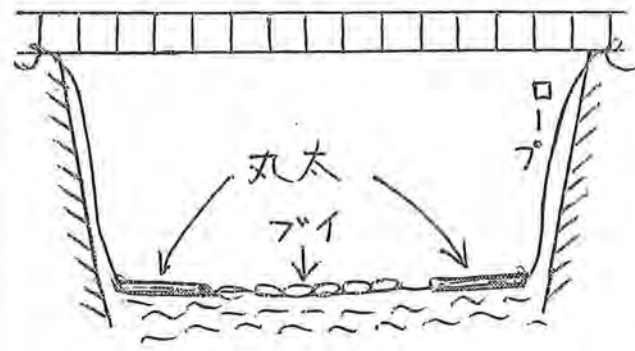
ゴミ止め実験、そのの見事に失敗

そして厩でもある。その環境は地域モラルを映す鏡でもある。谷津干潟は又、子供達にとってはふるさとである。私達のやってきたことは、ふるさとづくりでもある。そのふるさとたる谷津干潟が必要としていることは、権利の要求よりも、私産の義務の遂行である。

かねてより、干潟へ流れ込むゴミをなんとかして、水路で止められませんかと思っていた。

そしていよいよ、5月5日、長塚、大滝、大地原、田中、酒井の各氏と森田は挑戦した。長さ4m程の流木2本(直径20~25cm)にロープを結び、その向のロープには別のポリ容器をならべでりわく。これでも、潮の干満による水面の上下、その流れを考えて思いついたものである。

バイキングが敵の敵内をふち壊す意気込みで男6人、リヤカーで



運び、オノヤノコヤリで刻々を入水意不端。橋の柱にロープをかつちりとりゆわえつけ、セーノセイツと丸太を水路に投

げ込んだ。

ザブーンという水音と、ザーツという水を止める音。「さあ、どうかと期待の眼で見つめられた。思っていたよりも水の力は強く、ロープもかなり張っている。

獲物になるはずのゴミは次々と流れてくる。が、しかし、はずの結果は、はずでしかなかった。ビニール袋などのゴミは、何のためらいや抵抗もなく、スルッと丸太の下をぬらぬかにすり抜けていく。まったく、一つもため。いやあった、大きな発泡スチロール一つのみ。

いかになんでもひどすぎた。あつげにとらわて、すっかりしななかった。「おひゴミの野郎、お前にとら、つきあいつてもんがあんだろ。いかになんでと冷てえじやゆえかよ。少しづつれえどうにかなんねえのかよー」と言いたくもなる感じだった。

我々は、6年と前からその方法を考え、策を練ってきた。このゴミが干潟に流れ込むとここで止められればと思っていた。それがまあ、とんでとない甘い見通しだった。

この日の収穫は、この方法ではだめだということかかったこと。魚が泳いで入って来られ、ゴミは止める。皆さん、なんとかいり方法はないうんですかねー。

ふがんど

第395号

1989.5.12

谷津千瀧愛護研究会
 〒270 習志野市谷津三丁目二五十一
 電話〇四七四一五〇四四
 文責 森田三郎

会費 年2000円

創立
1974.12.9

ゴミゴミと

ゴミがすべてであらねども

ゴミのおかげで賞を頂く

3月3日夕方6時頃。タクシ

ー勤務日。家に用があつて休ん

でいた。会員の中村さんと原稿の

打ち合わせをしていた。

電話が鳴った。「はい、森田です」。

「森田さんですか。こちら吉川英

治国民文化振興会です。選考

の結果、あなたに受賞が決定し

ました。仏き受けて頂けますか」。

「はあ、いいわ」と私。「吉川英

治という人は知っていますか、文化賞

ってなんでしょうか……」。

そんな最初の具合でした。そば

にいた中村さん、見る／＼目を赤く

して、涙を流し始めた。「よかった

わ森田さん、よかったわ……」と。

× × × × × × × × × ×

4月11日(火)。午後5時から東

京の帝国ホテルで受賞式がありま

した。会員、知人、家族の12人の

人と1つしよに受賞してきました。

私の方から、橋本敏夫、五十嵐吉夫、

駒井克美、松枝多加子、松永弘子、

長塚進吉。国民文化振興会の招待

で、本田カヨ子、菅野徹、小川太一

郎(敬称略)。そんな父、弟、兄。

翌日は、青梅の吉川英治記念館

に行つてきました。

私がいいたい、なに程のことをやって

きたと言うのか。全国には、私より

ききとく／＼苦勞して、長年多

くのことをやっている人産がたくさん

いると思う。

あかをやった、こ外をやったなんて

いう考えか、いかにそ外がうぬぼれ

あったかを思い知らされた受賞式。

吉川英治賞贈呈式

平成元年度



……ゴミとハドロの中から、こんなオレをよくも拾ってくれました。

中村容子

陽だまりのベンチの上、
市川さん、コップ酒お
いしかったですか……

会員の市川幸二さんが亡くなら
れました。4月23日。叩オ。

5月1日夜8時頃、奥さんか
ら電話が入り、それを知らされ
ました。今日、今すべての用を
終え、一人でいるとのこと。すぐ
そのまま奥さんの市川秀子さん
の家へ行き、お線香をあげさせて
もらいました。

これを書きつつ、ありし日の市川さ
んの顔、思い浮かべておりますよ。

こへには

運転のプロを泣く

「あ、お客さんだ」。流しながら
り駅へ向う途中、赤ん坊を背負
ったおばさんが手を上げたのが見
えた。すぐにウインカーを出し、
道路わきに車を寄せた。

「はいどうぞとね」とおばさん。

「あ、ゆっくりでいいです。赤ん
坊の頭ぶっつけなれとね」とドア
を開けたまま私は言った。そ
れはよく、赤ん坊を背負った女の
人が、車に乗る時、かがみかたが

「ふかんど」を又作り
はじめました

この一年半程作っていませんでし
たが、又コシクと作り始めており
ます。

会員の方々にはお説が申し上げま
す。

いつと、作ろう〜とは思ってま
した。で、とくに議員になってから
は何かと気せわしり日々が続きま
した。しかしながら、最近、少し余
裕が出てきたような気がします。

生ナマの、手作りの、思ったことなど。
こへからよろしくお願い致します。

足りなくて、ゴツンと赤ん坊の頭を
車の屋根にぶつけたからだ。とたんに
赤ん坊の顔が崩れてワースと泣く。

「運転手さん、走らなくていいん
で。ええ、ここで」。「ええ、い、で、
〜」と私。ドアを締めて、停止ランプ
をピカピカつけたまま後を向ってお
ばさんを見ていた。「ごめんなさいね」
と言いなが、おばさんは、赤ん坊をシー
トに降してオシメを取り代え始め
た。ウインコだらけで、車中が臭い。
メーターは倒れていた。手早くすませ
とおばさん、「はいどうぞ」と、初乗りの
470円を置いて出ていった。

……なるほどね、こういうタクシーの利用の仕方もあるんですね。

中土手ぶち抜き作戦

ふかんど……京成電車の前に両手を広げて通せんぼして遊んでいた頃

ふかんど

号396

1989.5.25

谷津干潟愛護研究会
 〒275 習志野市谷津三二二五十一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000円

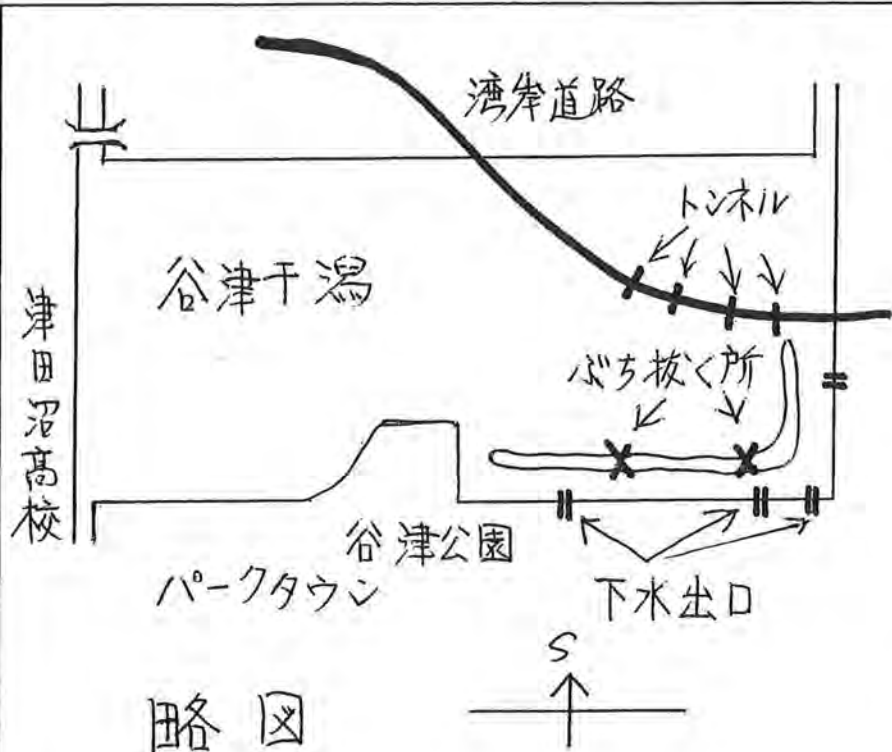
創立
1974.12.9

谷津干潟クリーン作戦 西部戦線の一環として

干満による潮の流れ、環流を良くするのが目的である。

この西側は、谷津干潟でとっとと環境が悪い所である。確かに悪臭はするし、まだくぐゴミも多い。クリーン作戦がとっとと遅れている所である。

下水の出口が4本ある。水の流れ木や交換と悪く、干潟とは巾5mの中土手でさえぎられている。中土手は、昭和48、49年頃、干潟と下水を分ける為に作りれた。



かつて、「谷津干潟は汚なくて臭いから、埋めてくれ」と、市民を言わしめていたのはこの所なのである。たんなる泥よりも更に悪化した、いわゆる「ヘドロ状」の所がけっこうまだ残っている。

ゴミも多い。その殆んどは流れてきたものでなく、捨てられただけである。泥や砂に埋まれ、干潟の呼吸を障がえているのである。

しかし鳥の数は多く、2年前、中土手と堤防の間のゴミを拾ってからの効果は予想以上。特にカモ、シギはすぐ入ってきて、エサをつらばみ、朝見るとその足跡でびっしり。5月14日(日)午前11時。愛鳥週間のまっ只中、千葉の干潟を守る会と共に作業に着手。総勢21人、子供7人。

掘っていくにつれ、水が下から出てくるので足場が悪くなり作業が大変になってきた。しかしなんとか一応の恰好はつけた。

潮が来て、北側と南側の水が繋がった時、「まずは通したかし」という安堵感がこみ上げた。今後更に、ようすを見るから作業を進めていきたい。

鳥って正直で、さっそくホウロク、チュウシャク、ダイゼン、そして夜にはゴイサギが来ます。

「よお、堀井英行くん。君はトビハゼつかまえるの上手なったねえ。そのすんでいる所や習性も憶えだし、アサリヤシオフキ、オオノガイヤカニ、カキをとるのかとってとつまくなるった。」

君がつかまえ方やそのようすを話す時の目の輝や表情、生き生きとしてさあ、いっしょうけんめい話すんだとんねえ。いりよあ。いちばんいい時なんだよ、今が。いつまでも、そういう時かなんだ。やがて君も、受験とか世の中の流れに入り、染っていくんだから。今の

君にはないだろう、自然と敵味合おうとか、価値あることをしようとか、意義あることをしなくちゃとか、位置づけや理論づけようなんて気はこわい。そんなイマワシイ、イヤラシイ考えは、そんでいい、そんでいい。その時が、そんがいちばん真実の、価値ある、二度も来ないものなんだ。だから、今のうち、うーんとやっておくといいよ。今こそ、否、今だから。この子、谷津南小6年生。いつによく干潟に来る。「クリーン作戦やるからサーフボード貸してね」と来る。なあと、ゴミなんかついでに拾えばいいんだよ。」

「あーい、ここにいらあ、いまあ出ていってやるぞあ」

「森田あ、干潟の森田はどこにいるうーっ」。声かうしておそく、小学校上級から中学生だろう、3、4千人。声高に揃って叫んでいる。声が動いていくし、自転車の音がする。

夕方5時頃、干潟の草むらに止めてあった私の車を見て、そして私がいなので合唱することに相なったにちがいない。

私は干潟でゴミを拾っていた。追いかけてよったと、ハミゴの所まで

で行ってからじゃ向に合わない。ちよつとしまくしかかったし、かと言って本気で腹を立てる気にならなかつた。相手の庫中と、何とあるが私を軽んじているばかりではなかつた。

こういうこと、何回かあって、ある時はメダカの池を掘っている時。又ある時は草むらの中でウンコをしてる時など。

一回など、たまに子供達の行手に私を見て、見はからって、ぬーっと出て、「ここにいますよー」と言って立ち去る。はだかだったとびくりにした。気がなげたく自転車をこいで逃げた。

遠くから「馬鹿ヤロー」と言ったのを、追かけてつかまえ、気をつけをさせて謝らせたこともある。

こういう資質、ちゃんと見守って大事にしてあげたい。

通おりやんせ 通りやんせえ……

ふかんどは、"心のビタミン"だ

ふかんど

ネ397号

1989.6.15

谷津干潟愛護研究会
〒270 習志野市谷津三二二五十一
電話〇四七四一五一一五〇四四

会費 年2000円

創立
1974.12.9

文責 森田 三郎

皆さんには、迷惑かど

私は、ふかんどを作っている時、いちばん元気が出てくる。

気持ちか落ちつくのである。私がか、在るべき所に在る、という感じがする。

これから、どんなことがあろうと、作り続けていく。定期的にはなり得ないだろう。それではない、いやないですか。

ふかんどは、会報というより手記の感がある。過ぎしこの方の、あの

夏雲、潮の香と、貝がラムとコロニ

ーがある。大砂じんと熱き砂と赤茶びたサンドパイプがある。波打つ草原とガマの穂がある。あの埋め立て地とウミネコやコアジサシがある。

ヨシ野と水溜りと水草がある。クリン作戦、汗と泥と砂がある……。そしてその彼方に、あの青くて豊かだった広大な干潟の想い出がある。

かくして潮の通り道

5月14日(日)。一応の恰好はつけた。しかし、不十分だったのでその後、5日間の作業を加えた。

今後どうしようすを見つつ作業する。そして、6月の末には、更に一ヶ所ぶち抜く。まさに汗と泥との闘いだ。今、ここを魚が通り、潮だまりにはハゼの子供がすんでいる。



上げ潮。最後の土盛りした所の砂を崩しているところ。



ぶち抜いた時、すでに潮は引っぱい。サーフボードで子供産が渡る。

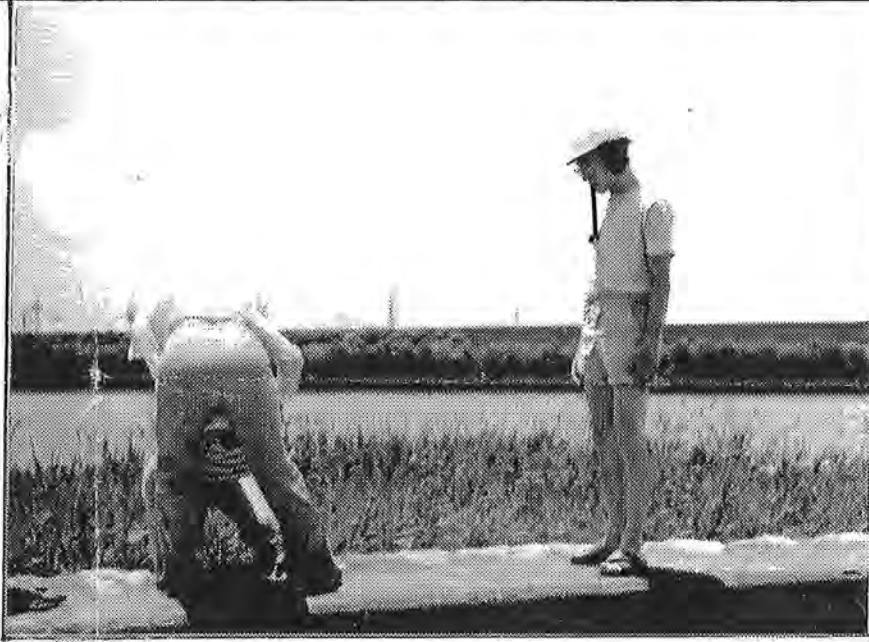
写真 中村容子

よっ、女ターザン



これ、3人の子持ちのおかあさま。身軽な動作に見えるでしょうが、実はバランスを失なうとブラブー。顔は泣きそう。下から、ゴカイとカニが見てりよ。アヒルの卵を見たい為。

でっかいお尻をドッコイショッ



うーん、こっけいや重いよ。でっかいお尻の人が、でっかいお尻の人を引っ張り上げるんだから。この後ドテツと、カエルの如く堤防の上。

← 干潟 さま さま ↓

タクシーに乗せて



私のタクシー。その名どハト交通。秋津小学校の女の子が3人。みんな干潟の近くに住んでいて、よく遊びに来る。

干潟のオブジェ



津田沼高校の女生徒たち。秋の日の午後でした。段ボトルや竹竿で作っていた。ローローとコオロヤが鳴っていた。

ふがんど

オ398号

1989.6.30

谷津干潟愛護研究会
〒75 習志野市谷津三二二五十一
電話〇四七四一五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000円

創立
1974.12.9

自分の頭のハエを追
えまいのです

紺屋というのは、干潟保存の為
のこと。白袴というのは、自分の
家の中や車や洗濯ものなど。
干潟のことではなにかと行政と
やり合い、自分なりに熱意をこ
めてやってきた。では、その熱意
が自身の身のまわり、いわゆる私
生活でどうだったかというところ
がまるでダメ。完全に「落第」。

手作り感謝状

ふかんど通信を配ってくれて
いる主婦の方からある時間か
た。

とないんですかあつ」と。

時には深刻です。着物を干
すのを忘れ、カビがまえてあわて
干したり、黄色いご飯を食べべ
たり。本当は、干潟のクリーン
作戦とさせることながら、自分の
車の中や部屋のクリーン作戦
をしなくてはいけないのである。
だから本当は、干潟やその他の
ことで、他人にどうこう言える
資格はないと思ってる。

た。

「なんにもないよ。行政とぶ
つかり、住民とさりがみ合った
こととあるしね、く休るわけな
いよ」と答えた。そして「
そう、そんならあたしの方が作っ
てあげたわよ」と、そんな具
合にして初めて頂きました。

昨年だ
から昭和63
年だ。「森
田さん今ま
でほんとう
に、なにか
感謝状と
か賞状み
たいなもの
とらったこ
と

橋田ミエ子さん、早川芳子さん、
島貫智子さん、篠原朋子さん。
昭和63年5月15日。B4サイズで
オレンジ色のボール紙。その他カ
ーネーションと若者向のジャージ。
生まれて初めての感謝状。



育て育て、こんなに大きくなりました

バンブーハウスのアイビー

たしか、昭和61年だったと思う。
 会員の中村容子さんが植えた。
 あずま屋「いとしぎ」にも植
 えたが、人の足に踏みつぶされて



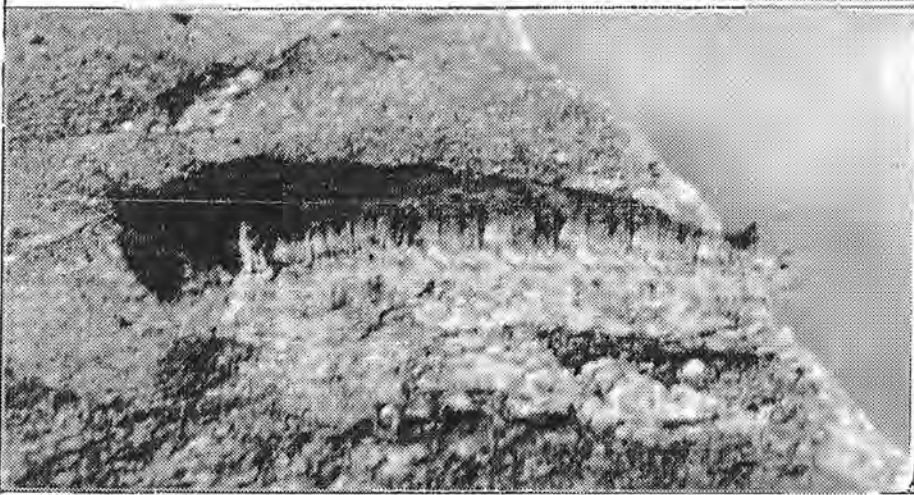
しまった
 せいか、あ
 る程度ま
 で育った
 が途中で
 なくなる
 てしまっ
 た。

今は流
 木が見え
 ない程に葉が生い茂っている。
 将来、観察舎やあずま屋
 が出来た時、そこにとこの様
 な緑で覆りたいと言っている。



磯辺の松の面影を...

との思いから、昭和52年に10本植
 えたもの。当時一本50円、高さ30
 40cmぐらいでした。



その頃、まだ、商売はしている
 かったが納涼台と残っていて、い
 にも埋め立て直後という感じ
 だった。植えるには近所の人と
 手伝ってくれた。

きっかけは、私が小さ
 かった時、この辺にはま
 だ松があった。それで、
 国有地とは知りつつ植
 えた。

季節を不すに、西に
 京の「お水取り」があ
 るのら、東に谷津干
 潟の「毛虫取り」が
 あっていいではないか。
 今年も恒例の毛虫取り。

今年とせつせと割りばしで毛虫取り。

↑長さ10cm、大き1.3cmの松毛虫。

ふかんじ

号399

1989.7.7

谷津干潟愛護研究会
 〒70 習志野市谷津三ノ二五十一
 電話〇四七四一五〇四四
 文責 森田三郎

会費年2000
 創立
 1974.12.9

受賞式には、橋本敏夫、松永弘子、駒井克美、松枝多加子、小川太一郎、菅野徹、五十嵐吉夫、長塚進吉、本田カヨ子、中村容子、三上文一習志野市長、森田吉男、森田みち、森田慎一の以上。(敬称略)尚、小林大光氏は理由あつて出席できませんでした。

森田三郎さんに吉川英治文化賞

ゴミ拾い続けて15年

「私だけが：申し訳ない」



受賞の感想を淡々と語る森田三郎さん(6日正午 習志野市役所で)

新聞配達をしながら谷津干潟のゴミを拾い続けて十五年、ついに昨年暮れ、国の鳥獣保護区指定にきつげ干潟をよみがえらせる原動力となった森田三郎さん(習志野市谷津三ノ二五〇一・同市職)に「吉川英治文化賞」が贈られることとなった。授賞式は来月十四日、東京・帝国ホテルで行われる。

この賞は「新平家物語」などで有名な作家・故吉川英治氏の功績を記念し制定されたもので今年で二十三回目。文化の向上に尽くし、たまたまの向上に尽くし、たまたま報われるべき業績をあげながらも報われることの少ない個人・団体に贈られる。井上靖、扇谷正造、三浦朱門、吉川英明

各氏が選定委員で、四組五人を選んだ。森田さんは十五年前、久し振りに掃蕩した際に一面のゴミ捨て場と化し、見る影もなくなった谷津干潟に心を痛めた。一人でゴミ拾いをはじめた。以来自宅を市川から干潟近くに移し、仕事も時間の折り合いのつけやすいタクシードライバースタッフとして、時間があれば天候、健康状態がどうであろうと谷津干潟の清掃に明け暮れた。当初は「くさい、きたない、みっともない」とバカにされ、ゴミ拾いをしていられるから空き缶を投げ捨てられることもあったという。

しかし次第に森田さんの姿が共感を呼び、仲間を増やしていった。六十二年には「谷津干潟の保全」を掲げて市議選に立ちトップ当選、昨年暮れにはついに県内初の国の鳥獣保護区に指定されるなど、地道な努力が実を結んだ。

受賞が決まった森田さんは「これまで賞は無縁だったので実感がわきません。でも会員(谷津干潟愛護研究会)のみならず、支持してくれたみんな、ゴミ拾いに参加してくれたみんなに、みんなの努力が第三者から認められたよ、と報告できるから、うれしいです。ただ、こうしたみんなが受賞しないことを考えるとすまない気がします。これまで自分が谷津干潟のためを思ってほしいかを考えてゴミ拾いをしてきました。これからもずっと、腰が曲がっても続けるつもりです。クリーン作戦はふるさとに対しての義務だと思っています」と淡々と話した。

産経新聞
 1989.3.7

読売新聞
 1989.3.7

父の干潟谷津に報われた



1日に1度は干潟を訪れ鳥にエサを与える森田さん

「干潟への愛」に光

吉川英治文化賞の森田さん

自然保護に15年

野鳥の楽園よみがえる

第二十三回「吉川英治文壇賞」の受賞者の一人に選ばれた習志野市谷津、タクシードライバースタッフとして、毎日新聞記者を見たのがきっかけ。吉川英治文化賞は、日本にわたる谷津干潟の自然保護文化の向上に尽くし、たまたま報われるべき業績をあげながら、生活廃棄物の捨て場となつていく干潟の姿に胸を痛めた。以来、新聞配達の仕事に並行して、ゴミの回収拒否されるなど、戦苦闘の毎日だった。

この森田さんの努力が次第に報われ、周辺住民の中から共鳴者が現れた。五十五年三月、谷津干潟クリーン作戦と名付けたゴミ集めが展開、定期的に行われるようになり、今月五日で二百二十六回に達した。

青春のすべてをかけて干潟の保存、美化に取り組んできた森田さんは、六十二年には、多くの市民から推薦を受けて同市議選に立候補した。

護に力を注ぎ、ひん死の干潟をよみがえらせて野鳥の楽園にさせた功績が認められた。森田さんは「実感がわいてこないが、今回の受賞は干潟そのものも思った」と喜びを語った。

喜びかみしめ「海に恩返しできた」

吉川英治文化賞に森田さん

谷津干潟の美化に15年

習志野市



【第23回吉川英治文化賞に決まり、受賞通知を見る森田さん】

日本文化の向上に陰ながら努力を続ける個人・団体に贈られる「吉川英治文化賞」の第二十三回受賞者に、習志野市職・タクシードライバーの森田さん(51)が選ばれた。たった一人で谷津干潟の美化、保護運動を始めてから十五年、多くの人の共感を呼び、ゴミ捨て場だった四十二の海を野鳥の楽園として、よみがえらせた功績が評価された。森田さんは「賞はみんなのもの。海に恩返しできた」と喜びをかみしめている。

昭和四十九年、子どものころ一日中遊ばせてもらった谷津干潟は、周囲を高層住宅に囲まれ、廃棄物と生活ゴミに埋もれて、死にかけていた。悪い臭を放ち、近くの住民から「汚いから埋め立てて」と苦情が寄せられていた。昔遊んだ海を取り戻した

森田さんに吉川文化賞 谷津干潟保護の業績で



「谷津干潟クリーン作戦」と名づけたゴミ拾い

習志野市議会議員で、タクシードライバーの森田さん(ハト交通)は、吉川英治文化賞とは、日本文化の向上に陰ながら努力を続ける個人、団体に贈られるもの。第二十三回「吉川英治文化賞」に選ばれた。

森田さんが今回選ばれたのは、昭和四十九年からたった一人で、谷津干潟の美化と保護運動を続けてきたため。十五年前、森田さんと初めて干潟で会った時、一枚の名刺を頂いた。大きな文字で「谷津干潟愛護研究会」とあったのが忘れられない。「森田さん、この会は何人くらいいるの?」「俺一人だよ」「こんな広い所を一人でゴミ拾いしてるの?」「俺は他の人たちと、能書しながら向かすの好きじゃないし……とにかく一人だとして行動するしかないよ」頭をかきながら白い手拭いも白いTシャツも泥まみれ。おまけに顔まみれ。干潟の周辺では野鳥観察のグループが、望遠鏡と図鑑片手にウォッチング。森田さんとは対照的な風景だった。

もれた干潟は臭いを放ち、近くの住民から「早く埋め立てて」と苦情が相次いで寄せられていた。市の当初の計画では、この干潟は緑地公園が学校用地として、埋め立てることになっていた。その当時、森田さんは干潟から拾い出した大きな角材を一本持って、泥まみれの姿で習志野市役所の担当課のデスクの上に置いて来たこともあった。その反応は、「森田って何者?」「あいつ頭おかしいんじゃないか?」「干潟って向んく?」等々。投所中の話題になり、以後、投所内では森田とか干潟に関する話はタブーという時期もあった。しかし、そんなことを気にしていられない。自分一人なんだから思いついたら行動できる。能書ならべたって先へ進まない。新聞配達をしていて森田さんは、朝刊を配り終えると干潟へ



森田さん

来て「ゴミ拾い。その台間をぬって、おれやんかへかけ合った。そんな森田さんを見ていた人たちが、いつしか一緒にやって泥んこになって「ゴミ拾い」を始めていた。大学生、サラリーマン、カマラン、ジャーナリスト、主婦など。このゴミ拾いを昭和五十五年「谷津干潟クリーン作戦」と名づけた。多くの人の協力を得て、行政を動かした。昨年十一月、谷津干潟は国の鳥獣保護区に指定された。干潟は残った。十五年前、森田さんが干潟を通りかかった時「あ、ふかんどだ。子どもの頃毎日遊んでた場所」。その時から一人の闘いが始まったのだ。突然の電話で受賞を知らされた。市議会議員だから、と言っ

ならしの朝日
1989.3.20
朝日新聞
早乙女氏ら吉川賞
今年度の吉川英治文化賞、文学新人賞、文化賞(講談社主催)は六日、次の通り決まった。

- 文学賞(副賞二百万円) 早乙女氏「倉津土魂」(全十三巻、新人物往来社刊)
- 文学新人賞(副賞五十万円) 椎名誠氏「犬の系譜」(講談社刊)
- 岡嶋二人氏「98%の誘拐」

- 文化賞(副賞各五十万円) 北海道日高支庁平取町「風谷七九」(一風谷アイヌ文化資料館長野野氏(三)アイヌ文化の保護保存に貢献)
- 東京都北区西ヶ原「三〇」
- 東京ゲーテ記念館理事長粉川忠氏「ゲーテ研究に大きく貢献」
- 新潟県新潟市蔵光「三三四」
- 〇、ハリ・マツサト「沙業小嶋昭氏(三)トキ氏(三)夫妻(全盲)というハンディキャップを克服、障害者の社会復帰指導など人々の生きる鏡となっている」
- 千葉県習志野市谷津三「二五〇」
- 〇、同市職・タクシードライバー森田三郎氏(51)「死にひんした谷津干潟を鳥獣の楽園に変え(よみがえ)らせた貢献」

贈呈式は四月十一日午後五時から、東京・帝國ホテルで。

三年後、協力が出てくる。近所の人が茶、コーヒー、せんべいを乗せた袋をそと置いてくれるようになった。昭和五十五年、ゴミ拾いを「谷津干潟クリーン作戦」と名づけ、毎月第三日曜と火曜に実施。昭和六十二年、一市民としての運動に限界を感じ「カネなし、コネなし」で市議選に出馬、トップ当選。多くの人の協力を得た保護運動は行政を動かして昨年十一月、干潟は国の鳥獣保護区に指定された。死にかけていた海は、野鳥の楽園として開発から守られる。

「いまだに実感がわきませぬ。私がもらっての支援、協力してくれたみんなにすぎないという気持ちです」と、とまどい気味の森田さん。四月、贈呈式に臨むが「海に恩返しができ、会員(百七十七人)に報告できることがうれしい」とも。

趣味は谷津干潟という森田さんの、次の目標は干潟の「街の中の自然公園」化。「最近お年寄りの散歩者が増えた。車イスの人も楽しめるようにしたい」。

クリーン作戦は今年五月で二百二十六回を数えた。「私の腰が曲がっても続けますよ。きょう七日からの市議会一般質問でも干潟と仮称・船橋インターについて、三上市一市長の政治姿勢をたたず。

谷津干潟の自然を守る

吉川英治 文化賞 森田さん、さらに意欲

習志野市の谷津干潟の自然保護で知られる同市議でタクシードライバーの森田三郎さん(43)が、日本の文化振興に寄与した人物に贈られる第二十三回吉川英治文化賞(吉川英治国民文化振興会主催)を受賞した。汚れきった干潟で十五年間、黙々とごみを拾い続け、苦勞の末、市民の協力を得て干潟のクリーン作戦を展開、魚や鳥のすみ自然を取り戻したことが評価された。

森田さんは「ごみ拾いは私が始めたが、市民や世論のバックアップがなかったら、自然は戻らなかった。この賞は私と一緒にごみを拾ってくれた人たちのものです」と話す。昭和二十年、船橋市生まれ。当時の干潟はハゼやウナギが泳ぎ、ギンヤンマやオニヤンマが飛び交う生物の宝庫だった。ところが、三十年ごろから周辺の宅地化、工業地化で、干潟の汚染が始まり、さらには心ない人々や廃棄物処理業者のごみ捨て場になった。新聞販売店員をしていた四十九年、「埋められていく谷津干潟」の新聞記事を見たのがきっかけで、毎日一人が干潟へごみ拾いに通った。五十二年、交通事故で左足を骨折した時も松葉づえでごみを拾った。初めのうちは、愛人扱いされることもあったが、徐々にごみ拾いの輪が広がって、五十五年から月三回行い、谷津干潟クリーン作戦は現在二百二十六回を数える。「干潟を含めた自然問題を広く市民に理解してもらおう」と六十二年、同市議に立候補、トップ当選した。



谷津干潟愛護研究会会長 森田三郎さん

森田さんは「昔の海には戻らないが、死ぬまで干潟の自然を守りたい。将来は干潟一帯を自然公園にしたい。ただし、干潟の中に人工的な施設は造らない」と夢を語った。

↑ 毎日新聞 1989.3.7

谷津干潟保存で 吉川英治文化賞を受賞

タクシードライバーの森田三郎さん(43)が、日本の文化振興に寄与した人物に贈られる第二十三回吉川英治文化賞を受賞した。汚れきった干潟で十五年間、黙々とごみを拾い続け、苦勞の末、市民の協力を得て干潟のクリーン作戦を展開、魚や鳥のすみ自然を取り戻したことが評価された。



森田さん(右)が、市民や世論のバックアップがなかったら、自然は戻らなかった。この賞は私と一緒にごみを拾ってくれた人たちのものです」と話す。

編集長 インタビュー



谷津干潟愛護研究会会長 森田三郎さん

新聞配達と、タクシードライバーの森田さん(43)が、日本の文化振興に寄与した人物に贈られる第二十三回吉川英治文化賞を受賞した。汚れきった干潟で十五年間、黙々とごみを拾い続け、苦勞の末、市民の協力を得て干潟のクリーン作戦を展開、魚や鳥のすみ自然を取り戻したことが評価された。

分。引き取り手がないわけが、市にかけあい、県にかけあい、大蔵省の管轄だったから国にもかけあい、ちがも。でも私のゴミ拾いの姿を見て、地元の主婦の方も参加してくれた。うれしかったです。そのうち、県益につめたゴミを車に積んで、泥まみれの客で市役所に出かけたんです。コレをもうにかしてくれ。市民が捨てたゴミだよ。それが今度はずいぶん押しかえして、そんな感じでした。今もクリーン作戦は、週一回。またガラスや鉄屑が埋まっています。干潟はもう、生かすの難しい。心鬼にしなければ、あんなことはできないよ。おフクロは「そんなことおまえひとりでやんなさ。と望んでいた『干潟』の手伝いをしただけです。森田武山の手引き編集長 高野 妙子

↑ サンケイリビング 1989.4.8

↑ ショッパー 1989.4.28



文学賞を受け た早乙女眞氏(右端)ら吉川英治文化賞者のみなさん 11日、東京・帝国ホテル

文学賞を受賞したのは、次の各氏。同文学賞 早乙女眞氏、田三郎氏、谷津干潟の自然保護 津士親、同文学新人賞 椎名を訴え、その誕生(せせい)に誠氏「天の系譜」、岡嶋一入氏 道を開いた。

↑ 朝日新聞 1989.4.18

賞牌(じよはい)、副賞授がある。長大な、鎮魂の叙事詩 与のあと、各賞の選考委員から「である」と評句。いすれもすでに多くの仕事を決定している経過などが報告された。ごなし知名度もある人々を選 脱稿まで十八年を費やし、成 ぶ結果となった新人賞を巡って

佐野洋氏は、「これをスプリング・ボード」という授賞の意味を考へるも迷いもあった。しかし候補作のなかで、やはりいいものはいいと残り、決定はほほ満場一致だった」と述べた。受賞のあいさつではまず早乙女氏が「勝者によって作られて来た『歴史』の欺まんを思い、真の歴史を、書き続けるうちにこんなにも長い歳月が流れていった。椎名氏は「いんな賞をいただいたが、これははじめの、年とったおれもくも喜んでもらえる分りかやらずい賞」とジョークを飛ばしたあと、「ものを書き出して九年目。飛躍の力」と話した。

みなさん、これ、頂けましたので...

ふかひんび

400号

1989.7.25

谷津干潟愛護研究会
〒270 習志野市谷津三丁目二五十一
電話〇四七四一五一一五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

贈呈式には次の方々に参加して
頂きました。

駒井克美、松永弘子、種田安代、
井本信子、五十嵐吉夫、長塚進吉、
中村容子、宮川郁子、桑原勝史、
松野良一、山岸弘子、上杯格、佐
藤康子、大滝俊隆、森田吉男、
森田みちの以上（敬称略）です。
尚、小林大光氏、松枝多加子氏、
松永孝氏、小川太一郎氏、本宮
和子氏、山口昭三氏は理由あって参
加できませんでした。

出来れば、どっとく／＼多くの
人に参加して欲しい。そんな、い

つわらざる心境。しかし、人数
に制限があったためそれにはな
りませんでした。
ここにあわびを申し上げます。
この賞はみんなのもの。これだ
すべてが酬われたなどとは思え
ません。
とし、「酬われた」と言うの
なら、その代償に、失われた
環境は余りにも大きすぎる。
そして、運動を支持した人々
の、その協力に、私は、余りに
礼を失して
いることが気
かりだ。

第7回 朝日森林文化賞

5団体と2人に贈る

緑を守り育てている個人や団体を顕彰する第七回朝日森林文化賞は、次の二氏と五団体に決
まりました。贈呈式は、六月三十日午後四時から東京・築地の朝日新聞東京本社で行い、優秀
賞に正賞のレリーフ「林の中の少女」（舟越保武氏作）と副賞各百万円を、奨励賞に同じレリ
ーフと副賞各三十万円を贈ります。敬称略（詳細は22・23面に掲載しました）

【自然保護】〇優秀賞

野生生物と人間が共存できる自然環境の再生運動を展開

清掃活動で谷津干潟の保護を訴え鳥獣保護区の指定を要する

〇奨励賞

アカウミガメの産卵地保護など砂丘の自然を守る運動に成果

【森づくり】〇優秀賞

学校林を学習の場にし児童らの自然愛護の心を育てる

地区有林の空間を都市住民に提供し森林への理解を深める

荒廃した山林の復興と林業の振興に取り組み山村を活性化

【環境緑化】〇奨励賞

絶滅寸前の野草ノシギクを保護し地域に栽培の輪を広げる

主催 朝日新聞社、森林文化協会
後援 環境庁、農林水産省、建設省

朝日新聞

1989.6.19 ↑

1989.7.1 ↓

谷津干潟を野鳥の楽園に



第七回朝日森林文化賞贈呈式で表彰を受
ける森田三郎さん（朝日新聞東京本社で）

朝日森林文化賞 森田さんに優秀賞
谷津干潟のごみ拾いを続け、レリーフなどを手渡した。
た、習志野市議でタクシー運転
手の森田三郎さん（左）は、三十
日、第七回朝日森林文化賞・自
然保護部門の優秀賞が贈られ
た。森田さんは協力者の中村容
子さんと出席。中江利忠朝日
新聞社長が「ごみ捨て場を野鳥
の楽園にやみがえらせて、鳥獣
保護区指定を求めた」と、賞



干潟の泥にまみれてビニール袋や腐材などを黙々と集めてまわる森田三郎さん
—千葉県習志野市の谷津干潟で



三郎さんの活動がいついかに、激励の手紙に返事も書けなかつた」と、この十五年を振り返る。連絡通信「ふかんど」は三百九十五号に達した。六十二年、環境保護を訴えて習志野市議に立候補、三千票、トップ当選した。現在タクシー運転手。仕事の合間に泥まみれの干潟クリーン作戦」を続けている。

干潟のゴミ拾い15年

千葉県習志野市
習志野市谷津三丁

自然保護部門
優秀賞
森田 三郎さん

目の谷津干潟だ。公園住宅とマンションと高速道路に囲まれ、二本の水路で約一ヶ所の海に繋がっている。宮川と横四百、横一、広さは四十秒ある。アシの茂みにカルガモが巣作り、引き潮で現れた砂地を「ふかんど」と呼ぶ深みで泳ぐ、魚や貝を採った。アシ節を吹き、息を吐き、沖のポンポン船とかけっこ。そして海濱を合した干潟と、その生き物たちが消える。少年の日に兄弟のように付き合ってきた干潟と、その生き物たちが消える。腰までも汚泥にまみれ、埋もれた生ごみや産業廃棄物を一丁二丁と引き取り出し、取り除く。その繰り返す。「一気通貫」「宛名行儀」とのひびいたが、黙々と拾った。指紋が消えるほど働いた。五年目、近所の主婦の中に協力者が現れた。県や市も方針を変え、やがてハンチョウが戻り、ノリができた。よみがえった干潟は昨年十一月、国設鳥獣保護区に指定された。

三郎さんの活動がいついかに、激励の手紙に返事も書けなかつた」と、この十五年を振り返る。連絡通信「ふかんど」は三百九十五号に達した。六十二年、環境保護を訴えて習志野市議に立候補、三千票、トップ当選した。現在タクシー運転手。仕事の合間に泥まみれの干潟クリーン作戦」を続けている。

先の、吉川英治文化賞といい、このたびの朝日森林文化賞といい、なんだか奥感がよくわからぬ。見ている、知っていて、思っていたことしばかりである。何ひとつ、私が作り、考へ出し、産み出したものはない。私より、鳥のことを知っていてる人はいくらでもおられる。私より、生物や環境のことを知っている人は無数にいたるのである。また、住民・市民運動とは何かにあるべきかなど、私にはよく外らも語った。資格は全くない。ただ、私は、有能な評論家より、愚直な実行者であつた。してきたと思つて。そして、明らな面よりも暗い面も。何か出来るかより、何か出来るかを見えてきたら、私の心はずっと以前に、ガチのめざしてしまつていたのである。私は弱い人間だ。何とか強からんとやりにくりにしてきただけである。

「何とかなければ」。たった一人のゴミ拾いが始まった。腰までも汚泥にまみれ、埋もれた生ごみや産業廃棄物を一丁二丁と引き取り出し、取り除く。その繰り返す。「一気通貫」「宛名行儀」とのひびいたが、黙々と拾った。指紋が消えるほど働いた。五年目、近所の主婦の中に協力者が現れた。県や市も方針を変え、やがてハンチョウが戻り、ノリができた。よみがえった干潟は昨年十一月、国設鳥獣保護区に指定された。